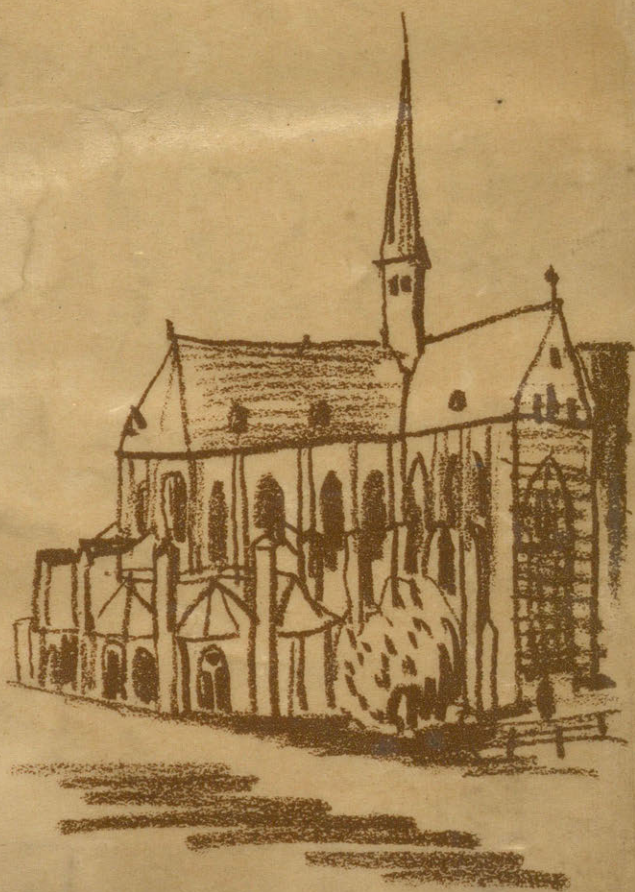
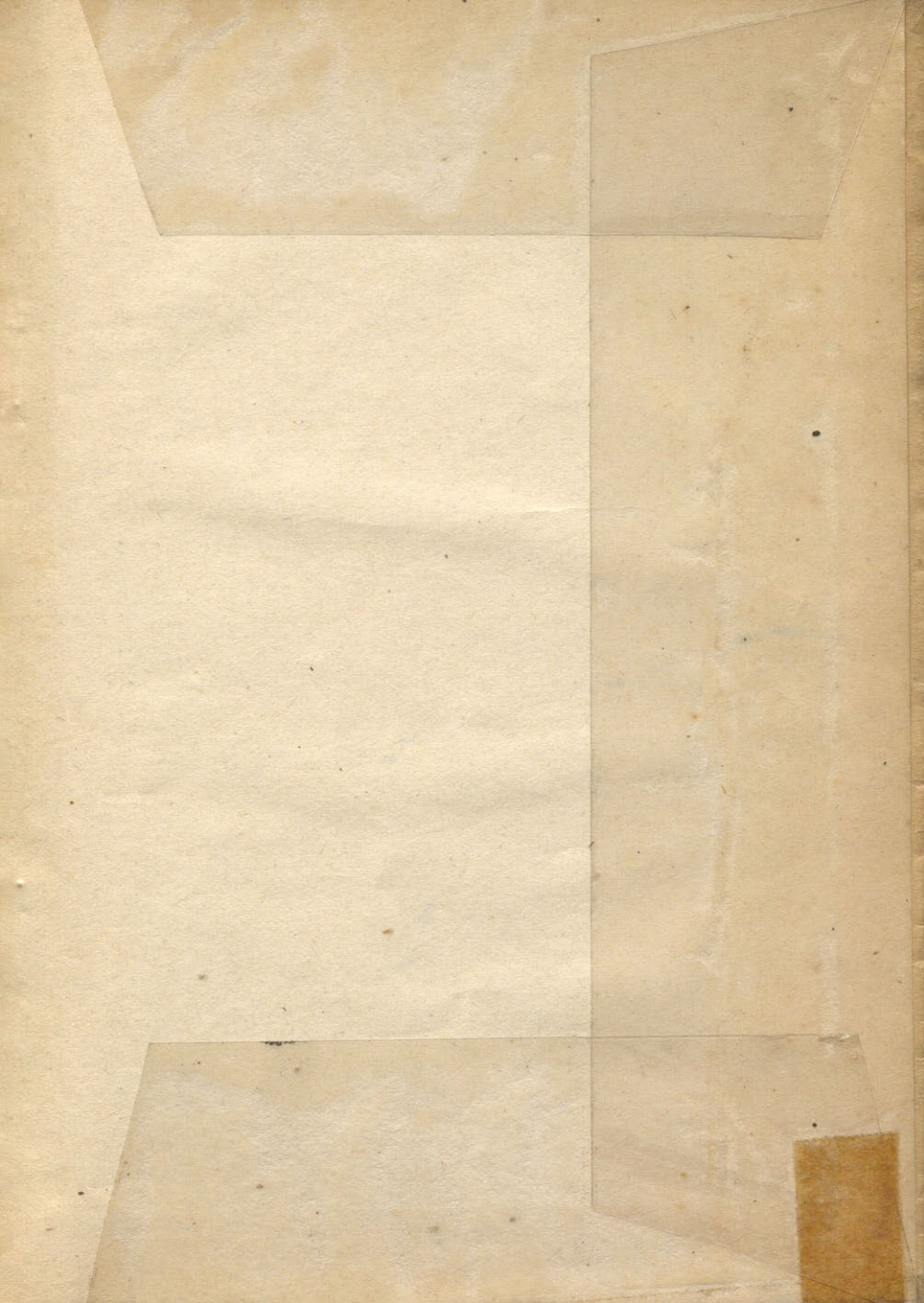


片山 哲著

青い鳥を求めて





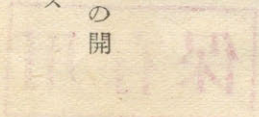
青い鳥を求めて

片 山 哲

保存用

朝 日 新 聞 社 刊

表紙のスケッチはM R A 世界大會の開
かれたコーのマウンテイン・ハウス





M R A 本部圖書室に於ける著者

青
い
鳥
を
求
め
て

まえがき

「戦後の欧州を観たい」ことは豫ての私の希望であつた。しかし、その時期はそう容易にくるものでないと、半ば諦め気味で、そのまゝにしておいた。ところが、本年五月になつて急にM R A 世界大会へ行つてはどうだという勧めを受けた。その話が急に進行して、五月三十一日羽田出発、妻と上原蕃君と三人、着のみ着のまゝで飛び出すこととなつた。出かけることになつた理由は、旅費、宿泊料萬端、先方持ち、お客様として招待をするのだという、まことに有難い待遇をしてくれることがその一つ。世界再建のために、如何にして道義を昂揚するかという私の最も関心をもつ問題について、世界大会を開催するということが非常に魅力があつて引きつけられた、それがその二。フランス、シューマン外相を

の他世界各国の政治家、社会運動家、労働組合の闘士諸君が多数見えるので、それ等の諸君に会うことが出来るということがその三。歸途、独佛英米を廻つて戦後の復興、並びに一般情勢の視察が出来ればそれはまことに楽しいことである。殊にロンドンでは英国労働党を訪問する機会を得るであろうことがその四。風光明媚のスイスの六月は実に奇麗であろう。特に写真を見ると、山上のマウンテンハウスからレマン湖を眺める風景は、なんと言つても世界一の風光だろうと想像したことがその五、等々であつた。

さて出かけて見ると、なか／＼の苦勞がある。第一は語学の点、第二は頗る会合が多く、お客様としての答辭、挨拶を常にやらなければならぬ点であつた。この意味で佛独伊英の四カ国語を自由にあやつるスイス青年男女を特にうらやましいと思つた。アメリカでは第二世諸君から、日本語はむすかし過ぎる、漢字はなんとかならぬものか等の国字改良の強い意見をきかせられた。このほど亡くなられた河上清氏から、この際思いきつて日本語をやめて英語にしてはどうかなどの意見も出てくる程であつた。若い方には特に語学をやつて貰いたいことを痛感した。

私どもに、欧米旅行の機会を与えてくれ、且つ費用萬端を引受けて下さつたM R Aの御好意については、深く感謝の意を表する。それと共に、物質萬能の考え方に対して、道義昂揚を主張して闘つて居られることに就ては、多大の敬意を拂うものである。

なお在外同胞各位が、祖国の現在及び将来につき、並びに日本民主化につき、非常な熱心さをもつて、研究されていることは感謝の至りであつた。

匆々の間に筆をとつた本書は、もちろん十分のものでない。また意に滿たない箇所も相当にあると思うけれども、本書が日本復興と文化、並びに民主化の前進、更に国際社会仲間入りの機会を促進するに役立つことを得れば幸である。その一助にしたいと思ひ、旅行後記の外に、国際社会民主主義、英国労働党今後の進み方、対日感情の好轉等を更に書き加え、こゝに出版することとした。なお、本書を出版するにあつては、朝日新聞出版局、上原蕃君、山崎廣君の援助を併せてこゝに感謝する。

一九四九年十月 秋高き日

青い島を求めて・目次

まえがき

スイス・コーへ出発……………一

ジュネーヴに着いて……………七

スイスあちらこちら……………一五

ILO総会の傍聴……………二二

戦後はじめの西ドイツ入り……………二七

パリの印象……………三五

はるかに故国を想う……………四三

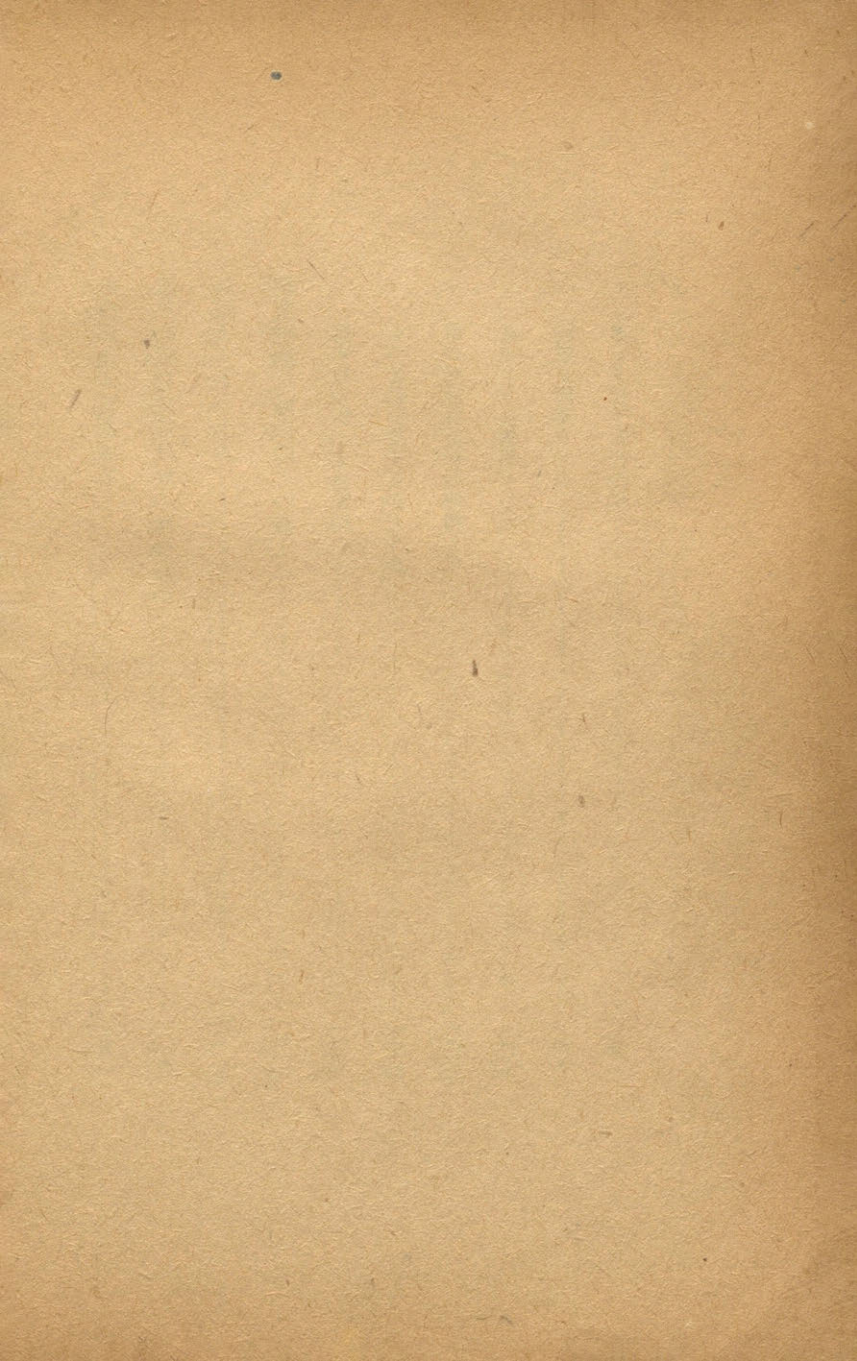
英国を訪う……………四七

さらばアメリカ……………五七

ハワイを訪れる……………六五

印象に残るもの……………七三

社会民主主義を求めて……………	九一
欧米の対日感情は好くなつたか……………	一〇五
日系人とアメリカ……………	一一七
産業社会化政策のその後……………	一三一
国有化の輝かしき業績……………	一三一
もつと社会化するかどうか……………	一三五
重要産業社会化の成績……………	一四〇
拡張より地固め……………	一四五
科学と産業……………	一四九
ポンド切下と労働覚……………	一五一



スイス・コーへ出發

《六月二日、ニューヨークにて》

六月四日からスイスのコーで開かれるM R Aの世界大会に招かれて、出發することとなつたが、手續がおくれてのび／＼になつていた。ところが急に五月三十一日になつて、すぐ今から出發するから出かけて来て呉れと係りの電話で、あわただしい數時間の後、アタフタと羽田へ駆けつけたのはちょうど午後五時であつた。いよ／＼七時に、生れてはじめて飛行機に乗り、もちろんはじめての洋行をすることとなつた。こんな事情で「はじめての外遊に際して」広くごあいさつをする機会を逸し、黙つて飛び出した。これは全く係り

が、六月四日の大会に初日から出席させたいための好意からであつた。

☆

飛行機は北回り米国經由一路スイス直行で、三日の晩までには着くそうである。飛行機は間もなく雲の上のぼつた。しばらくすると、ふと与謝野晶子の若いころのつぎの歌を思い出した。

天人の飛行自在にし給うとひとしき程のもの頼むなり

情熱の詩少女は、天女にあこがれる夢を歌い、思う存分の空想を描いたものだと思つたが、天女に非ず、天馬にも非ざる我々も自在に天空を駆け巡る時代となつたと、今さらながら月並みの感慨にふけつた。

まず快適の空の旅というのであろう。三十一日を二度迎え、東京のサンマータイムを着陸のたび毎に變更し、六月二日の朝三時に、はやニューヨークへ着いた。案内役の青山学院ハイカー教授の行き届いた注意と親切によつて、万事滞りなく運び、真夜中というに、MRA支部の諸君および同胞の太田敏夫、南江治郎君等の出迎えを受け、東京出発四十八

時間目でニューヨークのバンダービルト・ホテルに到着いた。はじめて見る夜のニューヨーク、さすがは眠らざる街。真夜中の四時というに、まるでよいのくちのように、食堂も開かれておれば、もちろんバーには大勢の若い人が集まっているし、ブラブラと男女が群をなして歩いている。明るいこと昼のようである。自動車の中で、ちよつと見ただけであるが、数日滞在して観察すれば、なお驚くことばかりであろう。このホテルの経営者は熱心なM.R.A.の運動家で、一行を丁重にもてなしてくれた。明日は朝九時半に出発して一路コーに向い、三日の夕食会に間に合うために、特別仕立ての飛行機をこゝから出すということである。一同好意を感謝しながら朝がた床に入つたが、私は起きてこの原稿を書いた。

☆

私の今度の渡欧の目的は、もちろんM.R.A.の大会に招かれて出席することである。この大会で、強く私の心が打たれるものあるを信じている。私も、あるものを、この大会から引き出したいと思つている。それは世界平和実現の根幹を何に求めようとしているか、と

いう点に帰着する。道義昂揚と平和実現との関係である。平素考えていることを、更に深く研究したいと意気込んでいる。のみならず、戦後の欧州を見て、復興の原理、即ち政治、経済、産業建直しの原理と、これを実行しようとする人間生活の原則とでもいふべき点をさぐりたいのである。これをわけていえば、

(一) 大陸における西欧民主主義の理論、特にフランスにおける極右極左を排して進みつつある政情。

(二) 英国労働党政府の重要産業国営、または国有政策の実績、戦後における社会主義政策の実相。

(三) アメリカにおける産業労働問題、労働政策等。

以上について勉強したいと思つている。言うまでもなく今度の私の洋行はどこまでも個人の資格であり、現実政治には触れないつもりであるが、私はどこまでも社会民主主義者として、否、社会民主主義を信奉するものとして見聞を広めたい。限られた時間に、飛脚のように各所を飛び回るので、皮相の観察に陥らなければいゝがと、今から懸念してい

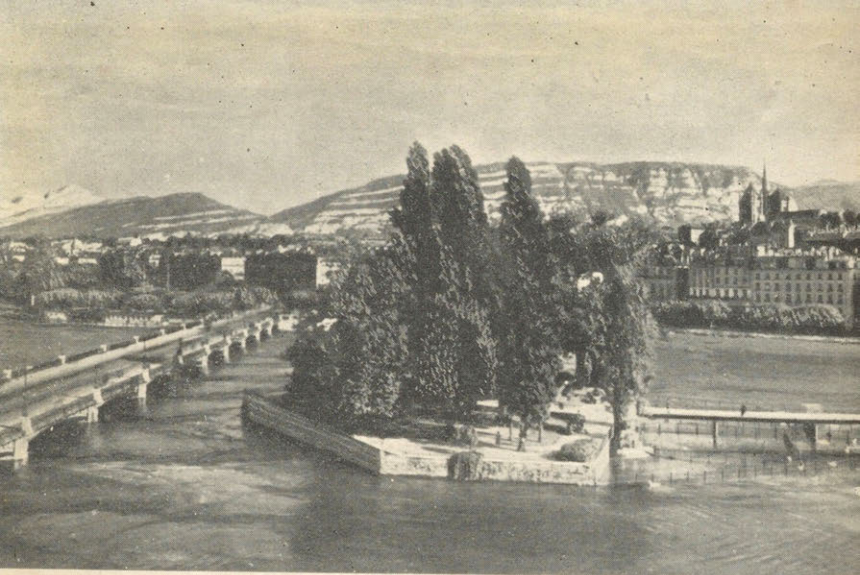
る。

私のねらいは各国民が自由の立場で定めるその国々の民主主義政治には、必ずある一つの大きな動脈がなければならぬと思つてゐる。民主主義の中樞神経とでもいうべき根幹があつてこそ、その民主主義は生氣をもつて、国民の中からあふれ出てくるのである。しかもその動脈は必ず、国境、人種を超越し、広く世界平和のために、人類幸福のために、文明のために尽す大きな原動力たるに相違ないと思う。広い意味でいえば民主主義の土台をなす源泉は何であろうかということだ。我々社会民主主義者の立場からいえば、民主主義、平和主義、社会主義の三つを結びつける大きな力となり、この三者を不可分の関係に粘着せしめるノリやニカワの役に立つものを探したい。あるいはこれは別個に存在するものでなく、それ／＼内在するものかも知れない。それでもよろしい。道義か教育か、強くひきつける力か。

☆

私ども老夫婦は若返つた心持で赤毛布を覚悟の上、この初旅に出た。それは一に日本民

主化の前進に、幾らかでも役に立つことを為し得ればいゝと思つてゐる。メーテルリンクの『青い鳥』に感心してゐる私は、今、チルチル、ミチルの心持で青い鳥を探しに旅立つて来た。民主主義、平和主義を生かしてくれる青い鳥を探しに、慣れない空の旅を強行している。青い鳥は何処かにゐるに違いない。ヨーロッパか、英国か、アメリカか。必ずゐるに違いない。私どもが探し得なかつたならば、リレーであとから探しに来て下さい。いや案外に民主主義の源泉青い鳥は、我々の手近にゐるかも知れない。もう六時近くになつた。夜もあけた。自動車が盛んに走つてゐる。これから寝るのも半端だから、出発の支度にかゝるとしよう。



ジュネーヴ，はるかにモンブランを望む（上）
モントルー，山腹はコー〔矢印〕（下）



MKA大會場マウンテン・ハウス（上）
大會第一日（下）

ジュネーヴに着いて

六月五日、スイス・コーにて

六月二日朝八時、ハーカー教授と上原蕃君（秘書）と四人で朝食をすまし、九時ホテルを出発、ニューヨーク飛行場へと駆けつけた。ニューヨークの繁華街をブラついて見たいと思つたが、その時間がない。ノドから手が出るような物ばかりたくさん陳列されてい
るが、買う金もない。

☆

今度はオランダ会社のニューヨーク・ジュネーヴ線に乗る。MRA行の一行で独占特別

仕立というのがこれである。一行五十五名男女老若ともに半々、途中酒をのむ人は全くない。煙草をふかす人も二三人しかないが、アメリカ式ですこぶる陽気である。團長はイーストマン君で、日華事變中に通商視察團長としてわが国に來訪せられたことがあり、前ロサンゼルス商業会議所会頭である。わが実業家の名前をすいぶん覚えておられた。この老團長も、時々青年とともに歌を唱い出す若さである。

程経て新しいニューファウンドランドのガンダー国際飛行場についた。こゝは今度カナダの自治領となつたが、土地が広いけれども濕地が多く、漁業が主産業のようだ。着陸してあたりかいスーブをすゝり、一路アイルランドへ大西洋横断飛行。至極平靜に、豫定の通り三日朝シャノンにつく。空から見るアイルランドは、わが国に似て小農組織らしく、畑が小さく入り乱れて区切られている。朝食をすまし、今度は一気にジュネーヴへ急ぐ。ジュネーヴには大休三日の午後四時ごろつくそうである。雲が多くて陸地はよく見えな

い。四日間ぶつ通しの空の旅、いつの間にやら疲れて寝る。

気がついた時は、はやスイス上空である。なるほど音にきく風光明媚の国、スイスのジ

ユネーヴである。三井夫妻、令息、令嬢、グッドロード出演の先発隊四人に迎えられる。異国で三井夫人の和服姿を見て、タッタ一人の和服であつた妻が喜ぶ。先発の青年達も三時間前によくやくこゝへ着いたとのことだ。廿九日出発、インド回りのコースをとつても、そう違ひはなかつたことになる。途中ロザンヌやモントルー、レマン湖畔を通つて山腹に高く天にそびえるコーのM R A本部に入る。ニューヨークからジュネーヴまで空の旅約二十六時間である。

☆

スイスへ行つた人はたれでもスイスは奇麗だとほめる。洋行九回のレコードをもつ米窪君は、六月のスイスを激賞しておつた。山紫水明、欧州の公園に適している。私の感じたことは実に掃除が行き届いていることだ。道路も、芝生も、畑も、チリ一つないといつてよい程うつくしい。赤や青ガワラも緑の中に点在して奇麗だ。しかし、コーの本部からの湖水のながめは、わが日本にも確かにある景色だ。まず第一は十和田湖の風光だ。次は奥日光の途中から見る中禅寺湖だ。道路がわるく、設備がまずいから劣つているように思う

が、わが十和田湖は、決してこのレマン湖に劣るものでない。大いに観光設備を整えたいものだ。

この湖水には爆弾はもちろんチリ一つ投げてはいけないので、靜かに湖面をながめながら想いにふけた。左の方には有名なシロン古城があり、むかし読んだなつかしい名前が浮んでくる。時間と金があれば歴史で名高い所を回りたいが、思う通りにはならぬ。スイスは連邦組織であり、政府も各派の連立である。蔵相は社会党だということに滞在したこと十五年の記録をもつ鮎沢巖君の説によれば、水力電源の豊富なこと、工業の発達していることで、スイスに日本は学ぶべしというのである。全く傾聴すべき所見である。九州くらいの大きさ、人口四五〇万である。こゝで出来るブドウのジャムは実にうまい。

四日はM.R.A運動の創設者ブックマン博士の七十一回誕生日で、一日ぶつ通しの盛大な祝賀会が開催された。各国からのお祝物、祝辞、音楽隊、劇等にぎやかであつた。会衆一同は博士に対し心からの祝福と賛辞を呈し、この運動によつて救われた経験談を語り合つ

た。博士も一同も子供のように喜び、夜の十二時までその喜びの声がとどいた。私は富士山や奈良、京都の日本版画と、四百年の傳統をもつ和歌山駿河屋のヨウカンを贈り、高橋君は大観の富士山の圖を贈つた。私は日本の経済窮乏で、いいものを贈ることが出来ないといつたところ、博士は「あなた方が来てくれたことは、欲びでありよき祝い物である」と、なか／＼うまいものだ。

☆

衆望を負い、ほとんど宗教的信仰のマトにならている博士は、その人格、閱歴が示す通り非常な強い信念をもつて、「絶対の正直、絶対の純潔、絶対の愛」の四つ絶対標準による世界建設運動を創められているのである。宗教の精神を基本とするが、宗派、国境、人種を越えて我々日本人にも心からの親しみを惜しまず、ことに東洋における道義昂揚、平和運動に対し非常に力を入れているのは感謝の至りである。博士はまた西ドイツ復興にも非常に熱心であり、本日（五日）午前中は西ドイツ問題についての運動の報告があつた。ウエストフアリア州内相や英占領下の労働組合課長ら多数の出席あり、力強く西

ドイツの道義復興が叫ばれた。

☆

MRAの運動とはいかなるものなりや。これについてはピーター・ハワード氏の「思想は脚をもつている」が、このほどわが国でも高原義男君の訳で出版されたそうだから、それを見られたが便利であろう。いろいろの感想がわいてくるが、ドイツとフランスとがいつまでも争つていたので結局共倒れであるというフランスの社会運動家、婦人闘士イリエヌ・ロー女史の悲痛な叫びや、ドイツをなんとかして復興しなければならぬ、労働者自ら立ち上つて祖国再建をやろうと演説をするルール炭坑夫組合長代理や、ねたみも憎しみも恐れもなく、人種、国境を越えて世界平和のために道義を昂揚しようとの主張には何人も全幅の賛意を表せられることと思う。

ドイツと同じ敗戦国、我々日本も安閑としておられない。祖国再建をになわるゝ勤労大衆諸君の一大奮起をこいねがわざるを得ない。私の探している「青い鳥」は、この旅行の終るころには探しあてることが出来ると思う。西ドイツの諸君の世話で西ドイツ訪問が

出来そうだ。この大会が終り次第、西ドイツ一番乗りをやりたい。そして諸君の御期待に
そいたい。

スイスあちらこちら

《六月九日夜》

保守政治は一国で固まり、共産主義はソ連を中心とし、社会民主主義は広く世界に友を求め得るの政治体系である。否、社会民主主義は特に友を求めべくあせらないでも、自然に友が集まつてくるイデオロギーである。これに基いてか、このM.R.A.の大会において、各国の社会党関係者が、自然に集まり、旧知のように、自国の情勢を語りつゝ、友情を温めた。昨八日の晩には、英、佛、スイス、スウェーデン、フィンランドと西ドイツおよび日本の七カ国の社会党云合が開催せられた。

その席で私は鮎沢巖君（二三日前からこの大会に出席）の通訳で、フランスのマダム・ロウワー、西ドイツのメンチエル氏に向い、日本社会党は、是非とも国際社会主義協議会（COOPERATION）に参加したい希望をもつて話を話し、その紹介、あつせん方を依頼したところ、両氏ともこれを快諾せられ、是非この世話をする旨約せられた。これはフランス社会党のあつせんで西ドイツ社会党がこれに参加するに至つた事実をきいておつたから、この話はフランス、ドイツ側を通じることがいゝと考えたからである。この協議会加盟国は、米、英、佛、伊、カナダ、オーストラリア、フィンランド、ノルウェー、スウェーデン、デンマーク、スイスおよび新らしく参加した西ドイツ、オーストリアの十三カ国であり、過般アムステルダムに大会を開き、イタリア左派社会党の離脱（共産党と提携のため）を決定したのである。近く本年九月に大会が開かれるというので、日本参加をその時の議題にしてもらいたいと頼んでおいた。連合軍司令部の了解の下に、日本としての必要な手続はとりたいと思つている。もしこれが実現出来るならば、社会民主主義運動の上に非常な効果があり、私の旅行の一つの收穫であると喜んでゐる。

この九月の大会では、コミスコから、M R Aの次の世界大会に、正式の代表を送ることをきめようという議題もあるそうだ。正式代表といえは米國議會は過日このM R A大会に正式代表五名を送つた。團長はジョウジア州選出議員プレ斯顿氏で、代表一行はこの世界大会に出席され、この運動の世界的意義について深く視察されたようである。私は同氏と会谈し、特に歸途米國通過に当り、上原蕃君と共に議會で再会することを約した。

☆

六月九日、M R A大会の一行はスイス國の招待を受け、首都ベルンを訪れた。私もそれぞれ政府の要路者に面会した。このブックマン運動は戦後の一つの新しい大きな動きとなつてゐることは認められる。特に仲の悪かつたフランスとドイツ（西ドイツ）とが接近しつゝあること、シューマン佛外相が熱心なるこの運動の支持者であるということなど、我々の研究すべき課題である。

三十五カ國八百人の人間が、大きなホテル三つに分宿して、道義昂揚の運動を真剣に討議しつゝある事実と、人種、國境を越えての友情と親切心には深く心が打たれた。わが國

においても一段と関心を深めてもらいたい。

☆

スイス国は徹底的民主国であるという。この十二年ほどは労働争議はない。もちろん農民争議などは全然ない。争議が起りそうになつても民主的な委員会があつて、事前に全部解決するという。富の程度はアメリカより高い。一人当り五〇〇〇ドルというから驚く。色々細かいことを調べたが、それは他日に譲る。一つおかしいと思うことは婦人参政権のないことだ。本日ベルンで下院議長にこのことを質問したところ、議長は「わが国における婦人の地位はすでに男子と同様になり、家庭においても社会においても、十分に認められている。それだから政治に参加せしめて、その地位を上げさせる必要がない。婦人自身も満足している」と答えられた。議長は保守党である。

会議がなかつたのでシロン城の古跡をたずねた。十二世紀に建てられた城ですこぶる古いが、湖水の岩を利用した城だからなかく堅固である。観光施設として感心したのは掃除のよく行き届いていることだ。クモの巣一つチリ一つない。ソウキンでふきとつた程に

奇麗だ。是非これはまねをしたものだ。この城の有名になつたのは、憂国の志士ボニツアードが四年間こゝに幽閉されておつた苦勞を、バイロンが詩にうたつたことからである。我々日本人にとつては憂国の志士が四年間も柱にしばられ、祖国のために戦つた悲痛な心持にヤタラに感激し、バイロンの名詩を思い出すのであるが、スイスの人にきいて見ると、あれはバイロンが詩化しただけであると、割合に簡単に片づけておつた。今一つウィルヘルム・テルの話をもち出し、これも国民的英雄の一人として、今でもうたわれているであろうと聞いて見ると、あれは北方の一つの物語に過ぎないと、これもすこぶる軽くあつかつておつた。然らばどういふ人物が国民的尊敬の中心であるかとたずねたところ、宗教的信仰をもつて社会のために奉仕の一生をさゝげた高德の人を、過去現在を通じて尊敬しているようである。なるほど自由をたつとぶ民主国らしいと感心をした。

☆

選挙制についても大いに研究したいと思つて、こゝへ集まつた西ドイツの政治家や、ベルンの要人にきいて見た。選挙については、金の制限も、運動の制限もない。窮屈な拘束

は一つもない。候補者は有権者にごちそうをしてはならないとか、映画を見せたり、音楽をきかせたり、利益供与をしてはならないという。そうすると、金や利益のためにつられて、自分らの票を売るとか、候補者が老大な金を投じて買収するようなことをするのはないかと、わが国で一番大きな問題になつてゐることをたずねると、相手は首をかたむけて、まことに不思議なおたずねだといわんばかりの顔をする。そしていわく「そんなバカなことをする候補者は笑われますよ。自分の投票権を売るような人は世間でつまはじきされますよ」という。私は恥かしかつた。重ねてきく勇氣はなかつた。全く民主主義の国はみな主義、主張によつて選挙権を行うことに徹してゐるのだ。早くそうなりたい。切實なる思いが、胸に迫つてきた。さらによく研究しよう。

I L O 總會の傍聴

◀六月十九日▶

西ドイツ入りの準備は全く出来た。M R A の関係者およびドイツ社会民主党本部からの招待状は既に受取つた。たゞ私ども一行の旅券が不備であるために、その手続きに手間どつていただけだ。それがとゞの次第に出発することとなつている。西ドイツ入りを報道して、まだそれが実行されないわけは旅券の手続きによるものである。私はいら／＼した気持ちで待機している。

さる十五日、ジュネーヴのI L O (国際労働機構)の総会を傍聴した。会場は実に立派

であり、堂々たるものである。フィンランド代表が報告演説をしているところであつた。オブザーヴァーであるが、わが代表は全部出席しておつた。本会場の出席はバラ／＼であるせいか至つて静肅、否、さびしいほどであつた。このILO一連の動きについては、いすれ代表から報告があることと思うので、私はたゞ横からのぞいて見た感想だけを書いて見よう。

☆

政治上におけるインターナショナル運動とは別個に、一九四五年に世界労連(WFTU)が結成されたが、戦後米英および西欧派とソ連との間にヒ、を生じ、一九四八年十月にいたり、米、英、蘭がまず脱退し、その他の小国もこれに代表を送らない情勢になつておつた。ところが今回のILO各国労働代表会合を機会に、新しい世界労連、すなわち第二のWFTUともいふべき会議結成の下話が、だん／＼と進められることとなつた。つまり六月二十五、六両日にその準備会が開かれ、これに参加を期待されているのは米、英をはじめ、いわゆる西欧十六カ国と濠州および南米民主国などであつて、鉄のカーテン東



中世の遺跡シロン城の夕景(上)



大會の東洋人の會合(下)



ドイツ、デュッセルドルフ飛行場着（上）
ルール炭坑の坑中深く見學をおえて（下）



方諸国はもちろん入らない。私自身はこの第二世界労連に賛成であり、加藤閔男労働代表もこれに深い関心をもっているようである。なおこのほかにアジア労組反共連盟（仮称）が来る九月にセイロン島で開かれるそうであるが、東亜の複雑な情勢が反映して、その成否が疑われている。このところジュネーブに世界労働運動の権威が集まり、それらの諸君がILOの一堂に会して、毎日協議を重ねているが、二つの大きな世界的流れが不気味のうちにたどつてゐることは、否むことが出来ない。

☆

私はダビッド・モース事務総長、ラオ副局長に会つて、日本がオブザーヴァーとして参加し得た礼を述べ、かつ正式参加についての今後の協力を依頼した。東京で会つたことになかつたヘブラー課長とこゝで初対面のあいさつをした。しばらく話をしようということ、湖畔の見晴しのいゝベンチに腰をかけて、日本の労働問題につき語り合つた。まことに印象の深い一場面であつた。課長は十七日に日本の労働情勢について報告演説をするということであり、近く加藤労働代表も意見を述べるといふのである。加藤閔男君は非常な人気

で各国労組の先輩から大歓迎を受けている。私も「加藤君はわが社会党員である」と喜んでつけ加えておいた。見上げるほど背の高いベル君は英国労働代表團に属し、一昨年わが国に来訪せられた世界労働運動通の一人であるが、それらの情勢について相当くわしく話をしてくれた。非常に得るところがあつた。

☆

これもわが国を来訪せられた方であるが、Y M C Aの総主事ストロング博士が特に私どものために、中国料理の小宴を開いてくれた。その席にはY W O Aのミス・バーンズ会長、世界宗教学議書記長トウプト博士、エール大学神学教授セツト博士および印度労働支局長マシウ氏など、キリスト教界の権威に会う機会を与えられたのは感謝の至りであつた。

話は非常に深味のある欧州思想界の問題から、キリスト教の社会主義、ドイツの社会民主主義と英国の社会主義について興味につきぬ意見の交換をした。この問題は私の研究課題であり、とくにドイツ社会民主党、フランス社会党、英国労働党の社会主義イデオロギ―の比較検討の前提をなすものであるから、とくに熱心にきいたところだ。それについ

てはさらに現地を回つた後にまとめて報告することしよう。

☆

ジュネーヴでは見たいところがたくさんある。第一次大戦後はなやかなりし国際連盟本部のあと、かつての国際労働会議場などがその一つである。とくに、後者についてはぜひ見ておきたいと思つた。それは鈴木文治、松岡駒吉、西尾末広、米窪満亮、菊川忠雄、河野密君らの親しい友人が大いにわが国労働運動のために活躍せられた歴史的舞台であるからである。日本代表はこの辺に席を占めたと教えられ、感慨まことに無量なものがあつた。現在開かれているILOの会場は、戦時中各国から資材を持ちよつて建てた新らしい別の会館である。

私はさらにジュネーヴ大学を見た。欧州でも有名な大学であるから、ゆつくり見学したいが、時間がない。建物は立派で校庭は実にキレイである。そこには十人の宗教改革家の像が刻まれている場所がある。そこに大きく「暗黒の後に光あり」とほつてある。感銘の深い文字である。私は戦争の後に光明あり、平和あり、と心の中で叫びつゝこゝを去つ

た。

戦後はじめての西ドイツ入り

待機すること二旬、ようやく手続が整つたので七月七日午前十一時空路ジュネーヴを出発し、西ドイツ、ルール重工業の心臓部デュッセルドルフ、デュイスブルグ、エッセン地方に向ふこととなつた。戦後來訪した最初の日本人一行ということで、以上三市の市長、ウエストフアリア州はもちろん、代表的重工業会社、商工会議所、石炭鉱業委員会、州労働組合、石炭労働組合等の歓待を受け、ブッ通しの会合続きであつた。

ウエストフアリア州の招待会には首相アノールド博士をはじめ各閣僚出席し、席上首

相は新らしい日独親善は産業と文化とを通じてなさるべきものなることを強調せられたことは感銘が深かつた。ア博士は来るべき八月十四日の西ドイツ総選挙の結果、新憲法下の内閣担当者に擬せられている有力者の一人である。私は同氏と食卓を共にして、西ドイツ政界の動き、連立問題、思想問題につき意見の交換を行つた。

☆

さらに日本でもよく知られているデマグ会社と銅製造クッパー・ヒュッテ会社を視察したが、さすがルール地方重工業の中心だけあつて、スケールの大きいこと、近代的科学設備の整備していること、労務者住宅問題に非常な努力を拂つていることは、特に日本産業界に報告したいことである。

戦後の特殊な現象であろうが、どこへいつても各会社は競つて労務者住宅を建設して、労働政策に深い関心のあることを示している。クッパー会社社長クッス氏は非常な活動家であるが、是非日本を訪ねたいとしきりにいつておられた。エッセンは石炭で有名な市である。この市には二十二の相当大きな炭坑がある。私も勇を鼓して一生に一度と思ひ、こ

こで中の上という炭坑へはいつた。

すつかり作業服と着換えて坑内入りをしたまではよかつたが、地下三千尺の豊富な炭層の掘出し作業を見てくれというのについ乗つて、眞つくらな石炭層の坂を若い総支配人と共に、三十分余にわたつてすべるように下つた。まさに義経のヒヨドリ越えである。途中でイキが切れ、ドウキが高くなり、腰がいたみ出し、休息してイキをしようと思えば霧のような石炭の粉末が肺の中へはいつてきた。これはエライところへ来たと思つたが、もうおつつかない。同行の上原君と悲鳴をあげた。水谷君が裸大臣として大威張りをしておつたが、ルール炭坑でヒヨドリ越えをしたことはまだあるまい。

☆

まことに重工業、炭坑共に戦前の六割から六割半まで復興しつゝあるという驚くべき再建の意気である。その意気まさに燃え上つている。三市とも相当戦災を受けている。デュッセルドルフ市では住宅課長と都市計画課長とが我々を案内して全市を見せてくれた。いわく、この機会に新らしい都市設計をやり、市営住宅を建てたい。焼けレンガを利用し

て、この通り新らしい住宅を建てていると得意になつて説明してくれた。戦災の過去を語るに非ず、建設の理想を語るところに面白味があつた。

私どものついた七日の晩に、クッス社長夫妻が早速我々を音楽会に招待してくれた。翌日のアーノルド首相の招待会にも、音楽の演奏で一同を慰めてくれた。各代表のレセツプションでは、ゲーテの言を引用したり、ベートーヴェンやモーツァルト、シューベルトなどの名が盛んに引き合いに出される。

ドイツ国民は音楽を愛する国民である。夜おそくなるまで音楽をききながら楽しく語り合つている。私は「敗戦なお音楽を忘れず」の感を深くし、産業の復興とともに別にドイツ復興の文化的意義を見出した。すなわちあれだけ徹底的にやられているに拘らず、意氣銷沈するとか、自暴自棄になるとか、左様な敗退的気分はなく、廢墟の中に立ち上つて、なおゲーテを論じ、ベートーヴェンの名曲をかなでるといふ国民である。

市や会社へ行けば沢山なパンフレットをくれる。このうち「ゲーテと共にラインを上る」というのがあるほどである。科学の力、藝術文化の力、大衆的なる労働の力と共にか

くして新らしき世界建設の姿が、目の前に現われつゝある。

ドイツ滞在の時間がなくなつてきた。ハノーバーの社会民主党本部の招待を受けておりながら時がない。まことに残念の至りである。やつと都合がつき車を飛ばして十二日朝、ハノーバーに向い、英独人クラブでシューマツハ党首と会見した。しかし、わずか十分しかない。党本部を訪れ、党本部の幹部と面談する機会を逸したことは残念であつた。シユ党首は片手片足を失つた不自由の身であるのみならず、十年もナチのために投獄されたが意氣さかんなものがあり、わずかの時間であるが、氣概と理想とをもつて人に迫るものがあつた。私に対し次の要旨で話された。

☆

はるく日本から訪ねて来てくれたことを非常に喜ぶ。ドイツ社会民主党は今さらマルキシズムに関する理論を繰り返すようなことはしないで、いかにして新らしきドイツを社会主義的に建設することが出来るかを検討している。党内にはもちろん色々な意見を持っている人があり、議論は十分するが、結論においてはよく一致している。各国の社会主義

はそれ／＼の国情に即して実行すればいゝので、英国は英国の社会主義、ドイツはドイツに即した社会主義で進む。日本社会党と親善関係をもちつゝ、共に社会主義社会建設のために努力しよう。

と固き握手をかわしつゝ我々のコミスコ参加希望にあつせんを約された。さすがに多年きたわれたる同氏、社会民主主義に対する信念の強さが、にじみ出ているのを見て、私はうれしさに深き感銘を覚えた。私の直覚だが、同氏は馬場恒吾氏そっくりだ。顔つき、せいの高さ、タバコのみかた、全くよく似て非常な親し味があつた。八月十四日の記念すべき日を迎え、党の勝利と西ドイツの社会民主主義発展を祈つて短時間の会見を終つた。

☆

行きたいところ、観たいところ、まだ／＼沢山ある。産業のライン河を見ただけでも、風光明媚のラインを上ることが出来なかつた。復興のルールを見たが、歴史と藝術とのドイッを探ることが出来なかつたのは、返す返すも残り惜しい。寸暇のない数日のうちに目についたことだけ二、三をあげて見よう。

まず第一にたれしもが驚嘆したことは、道路のいゝことである。デュイスブルグからハノーバーまで車を飛ばしたが、この間四時間、たんたんたる大道、交差点一つもない、ノンストップの快速力、これがフランス国境からベルリンに通ずるヒトラー道路で、放射線を描いている。

第二は戦時中の製作という国民車、一名ヒトラー車と当時呼ばれておつた小型自動車が大盛んに走っている。私の愛用しているベビーフォードに似ているが、エンジンが後方であり、それが実に小型であるのが特色だ。製作費も安いし、ガソリンも余りいらぬという話だ。

次は森林がなお生い茂っていることだ。名所旧跡の松並木、スギの大木を伐りたおしたわが国と違つて、樹木ウツソウとして繁っている。

次はショウウインドウが奇麗になつて、品物が豊富に山積されているし、通行人は黒山のようにのぞき込んでいることだ。しかし懐に金がないのを悩んでいる人が多いようだ。

配給制よりも切符制を採用していること、過般の幣制改革が相当効果を上げたという人が

多いなど注目される。

十二日午後四時ハノーバーを出発、十時フランクフルト発の国際列車でパリへ、そうして今パリへ着いたところである。小島朝日新聞通信員が訪ねて来てくれた。パリ通信はこのつぎとし、あわただしき間に第五信を送る。

パリの印象

七月十三日朝パリにつく。さすがに花の都、流行の中心、パリはにぎやかなものだ。公園の花壇、広場の花も奇麗に咲いている。特別ににぎやかなはずだ。十四日はフランス革命の記念日、国民祭だ。奇しくも我々は祭日のイヴを迎えることが出来た。パリッ子は十三日は夜通し広場、大通り、人の集まる処で歌い、かつ踊りぬくというのであるからすごい。ぜひこの盛況を観てくれということで盛り場を一回りしたが、銀座、新宿、浅草をいっしょにした十数倍のにぎやかさである。

十四日は晴天で暑い日であつた。凱旋門からコンコルドの広場へ行進する軍隊に対して、人々は感激の拍手で盛んに迎えている。お祭の盛況を観る機会を得たことはよかつたが、訪問したい人々は大てい留守で面会が出来なかつたのは遺憾だがいたしかたない。我はヴェルサイユ宮殿を觀に行く。世界各国の見物客が殺到している。

特別の便宜を圖つてもらい、前平和會議の鏡の間、ルイ十六世、マリー・アントワネットの居間などを一時間で観る。世界第一の宮殿だけあつて、その構想の大きいこと、豪華なことと驚くばかりだ。革命当時、パリの大衆がこの階段をかけ上つて、十六世および皇后を捕え去つたという話をきいて当時の歴史を追想し、ルイ王朝末期の大衆擄取とアントワネットのぜいたく極まる生活が憤激を買つたのも当然のこととしのべられた。ギロチンの置かれてあつた場所で、いま現に盛大な祭典が催されていることなど胸に迫るものがある。

フランスは自由と民権の祖国である。ルソーやモンテスキューによつて代表されているばかりでなく、国民自らが自分の力でこの自由と民権とを獲得したのである。自由を守る

ために革命を起したのである。この自由と民権を擁護するためには、あらゆる障害を排除することを辭するものでないという心持がみなぎっている。民主主義、平和主義、社会主義の基本は何か、フランスにおいては、それは自由と民権とによるようだ。従つて社会主義もこの根底において主張せられる感が深い。

☆

フランス社会党大会が七月十五日から開かれた。私と妻と上原君とは議長席のうしろの来賓席につき、党大会を祝するのメッセージを贈つた。その要旨は次の通りである。

「私は遠き日本より来り、貴社会党大会にメッセージをおくる機会を感謝する。昨日の国民的祭典を祝する。祭典によつて自由と民権とを生命とすることがよく現われておつたから、深くフランス国民に敬意を表する。日本は新憲法を制定し、戦争を放棄し、世界平和のために精進する国となつた。貴社会党がファッシヨと共産党とに鋭く対立して、健全なる社会主義政策を遂行せられることを望む。健全なる社会民主主義を通じてフランスと日本とは固く結ばれることを期待する。日本はまだ占領下にあるが、日本社会党はコミスコ

参加の希望をもつていたので、諸君のあつせんを望む。人類永遠の幸福のためにこの大会の祝福を祈る。」

壇上において党最高長老ブルム氏と感激の握手をかわし、時間の都合上、代つてモツシユ内相、グルンバック国際部長ら党最高幹部と会談、意見の交換を行つた。私の質問に対する答は、大体ドイツ社会民主党のときと大同小異である。先方から日本の事情について細かい質問があつた後、私の提出したコミスコ問題については本大会にこれを報告する旨約束された。ブルム長老と会談する機会を逸したことは惜しいことであつた。ブルム氏は写真でも想像される通り、新渡戸博士によく似た紳士であり、如何にも學者らしい文化人である。なお前労働大臣パロデイー氏からシューマン外相との会見時間を通知してくれたが、出発時間が差し迫つたために取やめとなつた。

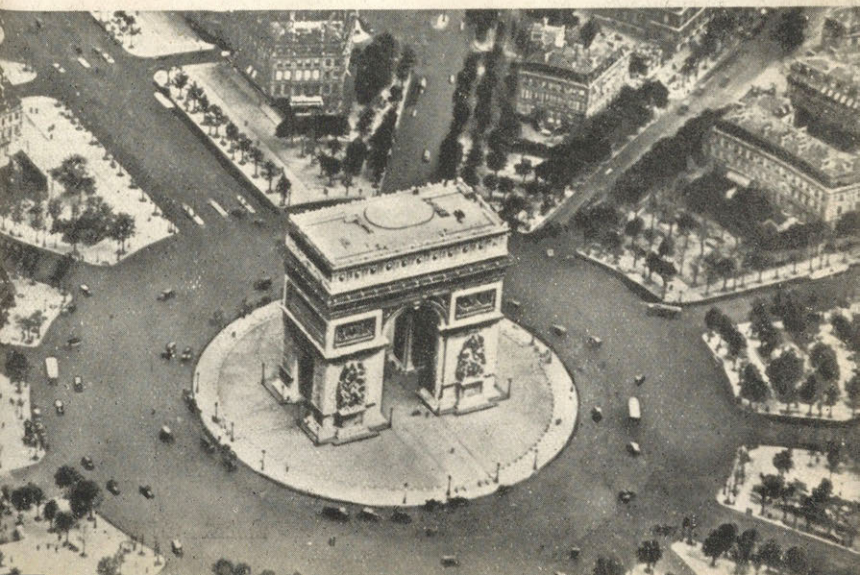
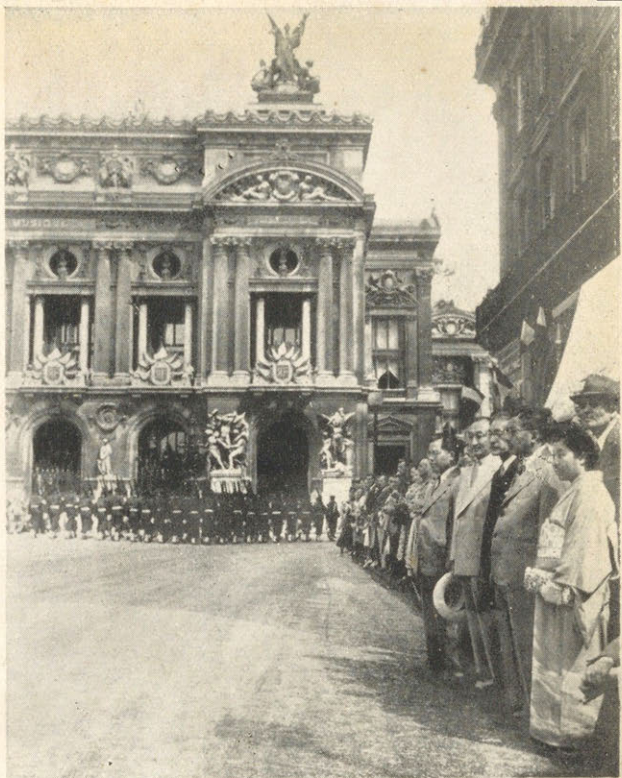
☆

長くパリで画の研究をしている荻須高德君の案内により、ルーヴル美術館で世界名画を観ることが出来たのは何より幸いなことであつた。この美術館はルイ王朝時代の宮殿であ



デュイスブルグのコッパー・ヒュッテ會社工場の見學

七月十四日、革命記念日にパリのオペラ劇場前で
分列式参観の著者(上)
パリ凱旋門(下)



つて、すこぶる広い。ゆつくり観れば一週間はかゝるであろうというのを、一時間で要領よく案内してくれた。どこにどの面があるか、ちやんと心得ているのに感服した。どの一つをとつて見ても世界的名画ばかりである。世界各国の画家が集まつて、まずホンモノを見ないことには批判は出来ないという熱心な研究振りである。素人の人気は依然としてモナリザのほゞえみに集まつている。日本だけの人気でなく世界的なものだ。若い画家が懸命に模写していた。フランス人は画を愛するが、さらに彫刻を愛するらしく、その数の多いのに驚く。有名なナポレオン塔をはじめとして、至るところに立像があり彫刻がある。

やはりフランス人は人間としてのナポレオンを愛し、慕つている。フランスの道路もドイツに劣らずよく出来ているが、道路政策の一番のものはやはりナポレオンであり、ジュネーヴからパリに通ずる大道もナポレオンの立案だそうだ。ナポレオン法典とともに印象が深い。

パリは華美であり、流行の中心であり、金づかいの荒つぽい都、裸踊りの夜の都とのみ考えるかも知れない。なるほど各国の観光客が集まり、豪華なホテルが並んでいる。けれ

ども、このパリの花やかさはフランスそのものを代表するものではない。パリを離れてひとたび地方へ行けば実に質素であり、およそパリと似ても似つかぬジミな農家生活であるということだ。人だかりの多い街々の会話はみな英語だ。実は田舎を見たかつたが、フランス滞在わずかに四日間であるから、地方回りをすることが出来なかつたのは惜しい。

☆

フランスの人口は大たい西ドイツの人口とほぼ同じぐらいの四千二百万程度ということだ。しかし面積は西ドイツの倍ほどある。従つて農家が多く、食糧は十分国内で供給せられてゐる。しかし一般物価は非常に高い。大たいフランはわが円と同じぐらいである。タクシーにちよつと乗つても百フラン、香水一ビン五百フラン、パリ生活はなか／＼大變のようだ。政府もこの物価問題には苦心をしている。議会で共産党が第一党でありながら、これに政権を渡さず、かつ閣内に入れず、またド・ゴール派をも除外して、三派連立内閣を組織して、戦後の難関を切り抜けようとしてゐるところにフランスの政情がある。四日間にわたる社会党の大会も、論議の焦点はこの連立をつゞけるか、破棄するかにあるよう

だ。その結論をきかないで出発したが、盛んな論議の末、おそらく続けることとなつたと
思う。

はるかに故國を想う

《七月二十二日午後九時半（日本時間）から約十分間、BBCロンドン放送局から日本向け放送》

私はスイスから西ドイツに入り、パリを経て英国に滞在し、米国を経て八月末に歸国できる豫定である。スイスは別として、ドイツもフランスも英国も戦争の災害を多分に受けている。しかし、三国とも過去をふり返ることなく、将来に向つて雄々しく起ち上つていゝる強い姿がみられるのである。もちろん、忙しい旅のことであるから一部分しか見ていないが、私はそれ／＼の特色を取上げてお話ししたいと思う。

まず西ドイツ・ルール地方ザールの工業を見たが、その復興状態は目ざましいものがある。エッセンの石炭産業は非常な勢いであり、さすがにドイツの科学と近代設備は復興の速度を早めていると思つた。

生誕二百年を迎えたゲーテはドイツ人のあこがれである。私どもの招待会でも、ある会社の社長がゲーテの言葉を引用し、市長がペートーヴェンの名曲を聴かせてくれた。こゝにも新しい平和ドイツ復興の力を深く感ずるのである。

フランスではパリおよびその近郊をみただけであるが、戦火を免れた花の都パリはうららかなものである。あたかも革命記念日の七月十四日、盛大な祭典の行列をみたが、ヴェルサイユ宮殿やコンコルド広場にルイ王朝、マリー・アントワネット盛衰のあとをそゞろにしのんだ。フランスは自由民権の祖国であるが、七月十四日、国を擧げて祝うのも国民自らの手によつて、その自由と民権とを獲得したからである。

ルイ王朝時代の宮殿であるルーヴル美術館には、諸君におなじみの「モナ・リザの微笑」があり、その他、世界的名画が陳列され、モネーの名画も飾られている。絵を愛する

フランス人、人間ナポレオンを愛するフランス人、私は新らしきフランスの特色が、かくして生れて来ると思う。

☆

ロンドンの繁華街も相当の被害を受けている。堅実にして重厚な英国民は、耐乏生活とヤミの排除を何らの不平もなく行つてゐることは、私のもつとも感心した点である。平和な経済はいわゆる流通秩序の確立を深く固めつゝあると思う。生活必需品の配給と切符制および自由販売は平行して進み、分配の公平は国民の深い理解のもとに行われつゝあるものとみられる。

労働党政府の石炭、イングリランド銀行、ガス、電気、陸上交通、鉄道、海外通信の国営政策はすでに成り、鉄鋼業国営案はもはや下院を通過している。新らしい生産計画と公平な分配を期する社会主義政策は着々と実行されつゝある。理論闘争が先行して実行を伴わぬというのでは決してないのである。資源の乏しい国における戦後の政策は、社会主義において他にないことを国民が深く理解し、自らこれを実行したと思われるのである。国民が

政党と代議士を通じて議会において政治をしているという、いわゆる議会政治の実情を私はこゝに強く感じ、また英国においては社会主義の時代すでに来れりと感じられ、これはもはや資本主義にあともどりすることは出来るものでないと考えられる。

ロンドンにはわが同胞が百廿名ばかりいるそうだが、近く会合して祖国の実情をお話して慰安したいと思つている。私はライン河を渡り、セーナ河岸に立ち、またテムズ河のほとりでわが祖国を思うこと切なるものがある。世界はその国の歴史と国情に即し、国民自らの特色を発揮しつゝ、新らしき機構をもつて自立復興にまい進しつゝある現状である。同胞諸君の御奮闘を心より祈るものである。

英國を訪う

英國では我々の耳になじんでいる「資本主義か社会主義か」の論争時代はすでに去つて
いる。また英國の社会主義はマルキシズムを基本とするかどうかなどの議論をする人もな
い。すでに時代は進んで、今日は社会主義実行の時代であることを示している。英國民は
政治の中に、また日常生活の中に、社会主義の実行を体験しつつあるのである。

議會を通じた石炭、電気、ガス、イングランド銀行、陸上交通、海外通信などの国营
政策は現実には戦後においては必要なものだ。分配の公正を期するためにはそこまで進まな

ければならないし、増産計画をたてるについても国民の利益を代表する国家がこれに手のばさなければならぬと考へてゐるようだ。問題はその方法にあるだけになつてゐるといつてゐる。

かくして国民の理解と納得のもとに、社会主義政策が行われつゝある。たゞこれに対する批判は、国民の自由なる選挙によつてのみあらわれるのだから、来年七月ごろに行われ総選挙が公正なる審判を下すであらうと英国の人々は異口同音にいつてゐる。まつたくそのとおりであらう。わたしは自由な立場にある多くの人々に来年の総選挙の豫想はどうだと聞いてみたが、大多数の意見はその差はわずかであらうが、やはり労働党は勝つだらうといつてゐる。これは勤労大衆が労働党の政策を支持してゐるからだ。戦後の復興に金があるのはきまつてゐる。負担の均衡と分配の公正が期せられればよいのだ。労働党の諸君も自信たつぷり必ず勝つるといつてゐる。わたしは切にこの成功を祈つてゐる。

ラスキ教授と語るほか、ロンドンにおいては労働党本部を訪問し、党幹部と面会し、さらに政府要路者諸君にも面会する機会を豫定してもらいたいと頼んでおいた。なおこのほ

かにシェークスピアの旧跡を訪ねたいとつけ加えておいた。ところが話しが逆になつて、休養かたがたという意味からストラットフォード・オン・アヴォンなどに二泊、マクベス劇を見て下さいと丁重な案内となつた。

☆

これは變更不可能のためすつかり豫定がくるい、せつかくロンドンにきていながらアトリ首相以下幹部諸君と面会時間が食いちがい、残念ながら会見計画がおじやんになつた。わたしの切望が達せられず、惜しい限りではあるが、いかんともしかたがない。そこで首相にはあいさつをことづけ、政府代表として前蔵相、現無任所相ヒュウ・ダルトン氏、また党幹部ヒーレイ、メーヒュウの兩氏に会い、すこしの間、本會議の討論を傍聴し、さらにロンドン大学にラスキ教授を訪問、コミスコ幹事トムソン氏に会う時間だけとなつた。出発まぎわにアトリ首相から党への使いと首相の写真をおくられた。

さて、わたしはラスキ教授に対し、欧州における文化発展史上大きな出来ごととして、キリスト教とマルキシズムをあげ得ると思うが、第二次世界戦争後これに匹敵し得るほど

の価値ある出来ごとは何と思われれますか、近代政治理論の民主主義の根底は何かとたずねた。

教授はこれに対し、これは実に大きな問題である。一言では言い得ないと前提して、世界平和を実現するためには民主主義の徹底をはかるべきはいうまでもない。いかにして民主主義の徹底をはかるべきか、これは実に教育をおいてほかにない。一にも、二にも教育の重要性を考えるべきだ。世界の政治家たちはこれを忘れている。いまの人間に頼らないで、新時代の教育を受けた次の時代の人々に深い信頼を置きたい。社会主義の実現により、世界の平和が出現してもこれは暴力によつて達成されるものでないと、連発する皮肉と警句で一時間余にわたる会見を終つた。

☆

私の通つてきた道すじはほんの欧州の一部分である。ドイツ、パリ付近からフランス北部、イングランド、スコットランド、見渡したところ山らしい山はない。いわゆる山岳地帯ではなくたん／＼たる平原である。ナポレオン戦争も、第一次大戦も決戦はこの欧州大

平原で戦われたのであろう。大軍を動かすのに適しているのみならず、よく手がとぎ開かれていた。大部分は牧場であるが、広々とした豊かな野というべきものであろう。高い山岳の中に生活をしている我々日本人にとつては、意外に思われるほど欧州人は天然に恵まれていた。これが我々と違う大きな差異の第一歩である。

第二点は全く地震のないことである。レンガを積み重ねて家を建てても、石を積んでへいをつくつても、平気で生活ができる。この家は何百年も続いているというのがさらにある。ロンドンやパリの高層ビルや住宅は古くなつて黒ずんでいる。鉄筋でなくとも地震がないから安心である。彼らはまつたくこの点において恵まれている。地震のみならず天變地異に驚かされることがない。例えば烈風吹き荒むということもほとんどない。カフェ、バー、百貨店の通りでは道路にイス、テーブルをならべ、悠然と行きかう人々をながめながらビール、コーヒーを飲んでいる。風がないからほこりがたふない。農村のポブラ、アカシヤもまつすぐにのびている。

第三は見渡すかぎり牧場である。わが国のような水田はもちろんなく、畑も極めて少

い。これに比べると米作ほど天候に支配されるものはない。二百十日や二百廿日をひかえて、国民が毎年心配するのところがつて、天候の支配をうけない。この牧場を中心とする欧州農業は、多角経営で機械化農業である。これまた我々と大違いである。欧州における重要産業は、すでにこの基礎のでき上つている自然を持ち、この上に近代的科学を利用するほか、相当豊富なる資源を持つているので、国民生活の水準はすでにある一定の程度に達しているの感がある。土地の広さと人口密度の関係、河川の状況、このほか歴史的経過といろく総合をなしたる結果、欧州人はこの生活形態および文化において、ある程度の水準まで上りつめているとも思われる。

これに比較すると我々日本人は、不利なる自然のもとで悪条件のために生活水準をあげることができずあせつている。我々はこれら重複せる悪条件と戦いつゝ、自然を克服する奮闘努力が一そう必要となつてきた。悪条件とあえていつたが、これに打勝つ力、盛り上つてくる国民の情熱がたぎつてこそ、新憲法下我々の生きる道が開かれると信ずる。

これを長く記述したわけは、欧州の戦後の復興と国民の耐乏生活とは、すでにある水準

の上に立つて現実にこれを行つてゐることである。遺憾ながら我々はこの段階にまで上つていない。これは悪条件が大きな原因をなしているからである。それは今から克服できることである。またそれを克服することは我々国民の大きな責任である。

☆

シェークスピアのストラットフォード・オン・アヴォンに行つた。なか／＼にぎやかであつたが通俗化しているので失望した。また史跡保存はこの国でも難しいものだ。ことに歴史を尊重する英国では議事堂などもさながら議会史展覧会の観を呈している。時間がなかつたので大英博物館をみる暇はなかつた。どうしてもものぞいておきたいと思ひ、出発の日の午後五時閉館のちよつと前に美術館に飛びこむように入つて、わずか十分ぐらゐでその辺の様子だけを見回すことができた。さすがパリのルーヴル美術館に比すべき世界名画のにおいだけをかぐことができた。これは特に朝日新聞の福井特派員の世話による。ロンドン塔も外からちよつとのぞいた。我々日本人は特になじんでいるが、土地の人には大した名物でもないらしい。

福井君、小泉君、高平君などのあつせんで在ロンドン日本人会を開いてくれた。五十人ほどの諸君が集まつた。渡英五十年という最年長者もおられるし、大成功者である神谷昌一君もみえるし、久しぶりで故国の近況を語る機会をえたことを感謝し、夜のふけるのも忘れて昔物語を続けた。

案内者のプログラムはバーミンガムのオースチン自動車工場と、グラスゴー造船所の參觀を含んでいるので、かけ足でそこを回つた。オースチン工場は一日の製造車台五百という能率ぶりで、作業は取付全部待つたなしで動く流れ作業式には驚いた。

かくして私はグラスゴー飛行場を二十三日、日曜日夜の二時に出発し、その日の午後ニューヨークに着いた。欧州の滞在はあまりにも短いので物足りなさを感じる。案内者のプログラムによる強行軍だから致し方がない。しかしながら視察の見当はくるつていないつもりだ。

いまヴァンダービルト・ホテルについた。日曜日の午後だから町は静かだが、飛行場から町に入るまでの自動車の行列には驚かされた。これは海岸へいつた避暑客の帰りであつ



SHAKESPEARE MEMORIAL THEATRE
STRATFORD-ON-AVON



ストラットフォード・オン・アヴォンに於ける
シェークスピア記念劇場（上）
ニューヨーク市の繁華街、ブロード・ウェイ、
煙草キヤメルの廣告（下）

國情緒、フレスノの Roeding Park (上右)

リヤム・テルの像

(アドルフのテル・デンマール) (上左)



ロサンゼルス飛行場にて著者夫妻 (下)



た。日曜日に自宅でくすんでいるような人は、ニューヨークにはいないとの説明だつた。
わすかな時間しかないが、これからニューヨークの金と物と科学の力とをみることにしよ
う。

さらばアメリカ

東京で『失われた週末』『心の旅路』を観た時、私にはこの映画の感じがピンと来なかつた。なんとなく軌道はずれて、インテリの感興を引くだけの力はないと思つた。ところでニューヨークに来てブロードウェイを通つて見ると、この映画の感じが動き出している。まさに奇想天外というべき広告の競争だ。行人を驚かす奇抜な構想が、優れた広告になつている。例えばホントの水を滝のように流している百貨店の広告がある。注にいわく、これは水の浪費ではない、繰り返し／＼使用しているから心配御無用、と張り出し

である。次はキャメル煙草の宣傳に大男が口をあいて、パッパとホントの煙をハキ出している。この煙にタバコのニオイを出したいと工夫中とのことだ。

お次ぎはシャツ屋の二階に男女裸体の大きな人形が、ネオンサインであかるく浮き出している、などの調子だ。平凡な広告は一つもなく、人を驚かし、アッといわせるものばかりを集めている。成程、平凡な敘事的なものでは、総て役に立たなくなり、少々脱線気味のものゝ非凡映画、優秀広告として、大いに歓迎せられているようだ。

豊富なる物資を思う存分に費い、科学知識の浸透を徹底化しているところにアメリカの特色がある。それはあらゆる面に現われているが、飛行機、自動車、電話がトップを切つている。現在はまさに飛行機の時代だ。私もアメリカでは全部航空路で、汽車には一つも乗らなかつた。空路は全く四通八達だ。ニューヨーク、ワシントン間はわずか一時間半、ニューヨーク、シカゴ間二時間、一日数回の定期航空があり、お婆さんも、娘さんも、さも気軽そうに、カバン一つで降りしている。時間短縮の超特急が近く出来るという話で、

ミンナそれを楽しみにしている。国内航空も今日ニューヨークで出せば、明日はサンフ

ランシスコへ着くという快速調だ。農家は飛行機で種をまき、肥料をやり、花屋はその日の花を空路大都会へ運ぶというから実用向となつている。自動車に至つてはなんといつていゝかほとんど形容の言葉のない程、数多くの行列をなしてアメリカ全土にあふれている。ロサンゼルスでは市民平均二人に一つのカーを持つてゐるというのだから豪勢さにビツクリする。

近ごろモーターの広告が盛んに張り出されている。これは自動車旅行をする人に、自動車のホテル、すなわち車のお預り所が出来た広告である。これはついでにお客も泊めますというのだから、主客轉倒の新式ホテルだ。その外に野外劇場が大分諸方に建てられている。日本のベニスの商人野外劇が米国でも流行し出したのかと思つたが、これはソナものでない。場内に自動車を乗りつけて、車に乗つたまま映画やレビューを覗くという趣向なのだ。大分以前から流行しているが、車に乗つたまま料理をたべるといふ不精者にもつてこいの新レストランも出来ている。ついでに書くが、大抵の大きな町には夜どおしの大きな映画劇場がある。夜中の二時、三時ごろになると、お客は映画を見ないで大部分は寝

ているという話だ。ホテルに泊るよりはこの方が安上りということらしい。モーターに並んでエローテルという大變人ぎきの悪いホテルも出来ている。これは自家用小型機で空の旅行をする金持のために、飛行機預りのホテルが出来たという広告だ。

☆

電話は全米を通じていわゆる「即時」であつて、スグかゝる。電報も実に快速で気持がいゝ。日本でも知られているテレタイプも盛んに活用せられ、ニューヨーク、シカゴ、サンフランシスコ間で、しばしばテレタイプ会議が開かれるそうだ。文明の利器はかくしてぐんぐん進む。

国連本部はニューヨーク郊外にあり、臨時の建物であるが立派なものだ。近く市内のロックフェラー所有地所に世界的豪華高層のビルを建築するそうで、目下基礎工事中であつた。これが完成すればニューヨークの新名所が一つふえるわけだ。事務総長代理に面会し、日本におなじみの海軍関係顧問のニミッツ提督と漫談を交え、ちようど開会中の保障委員会を傍聴した。ソ連、米國兩代表が激論中であつたが、花々しき國際言論戦の光景

というところであろう。

ワシントンのみならず、米国歴訪を自分の思う通り計画したかつたのであるが、色々の事情でそれが実行出来ず、前報告通りになつたのは惜しいことであつた。あれ以外に酷暑と戦いつつ、議会図書館を参観した。特に日本に関する研究の行き届いているのには感嘆した。ドイツで訪ねることの出来なかつたゲーテ二百年祭記念展覧会を偶然こゝで観る機会を得たのはうれしかつた。その他ゼファーンソン起草の独立宣言原文、アメリカ憲法の草案など重要な文献を見て、それからワシントン記念館を訪ねた。館長は来訪者名簿を示して、戦後最初の日本人来場だと喜んだ。その名簿を見ると、寺内大将をはじめ、わが国戦前の武将が相当沢山署名をしている。ワシントンは八千エーカーの大地主で、経営才能の優れた人であり、なんといつてもアメリカでは一番尊敬せられている建国の恩人である。各国とも建国の偉人、中興の祖、文化的恩人などを盛んに表彰している。アメリカではワシントン、リンカーン、ゼファーンソンの三人である。言い残したが、私が議会を訪問したことを、正式に下院議場で報告せられたそうだが、これは感謝の至りである。豫想通り

アメリカの議会は実に完備に近いまで整備している。各議員は個人の控室をそれ／＼二つから三つ使用し、補助員を数人つかつてゐる。私が上院外交委員長に出会つた時に、個人控室を見る最初であつたから、これは委員長に提供せられた特別控室ですかときいたほど、全く個人室は整つてゐる。なお音響がわるいということ、下院議場は大修理中であつた。上院下院を結ぶに地下道電車をもつてしてゐる。議会に限らず、全体を通じてのことだが、なんといつても総てが大がかり、大規模、惜しげもなく材料を十二分に使つてゐる。広々とした面積、有り余る程の材料、大きなスケール、労力を省いて機械力の利用、全くうらやましい限りである。

☆

ワシントン、ニューヨークを初め、シカゴ、デンバー、シアトル、ロサンゼルス、サンフランシスコ等で多数の在留同胞に面会することが出来たのは何よりの喜びであつた。五十年、六十年の苦闘を語る老先輩も、まだ祖国を知らぬ二世も、共に懐しさ一ぱいで堅い握手をかわした。歓迎せられつゝ、夜のふけるのも知らず、祖国の現状と将来を話し合つ

た。私は各地で講演会を開いたが、多数の同胞が熱心に聴いてくれ、眞剣に質問をしてくれた。私も深い感激を以て、「これより故国に歸り、日本民主化前進のために全力を傾倒しよう、日本再建の理論は健全にして民主的なる社会主義を以て外にない。日本救援のために尽力されたる在外同胞諸君は、さらに一段と祖國民主化のために御支援をこう」と結んだ。

☆

米國に入つて、在留同胞に面会し、サシミ、みそしるを味わうにつれて、一フロあびて浴衣一枚の夕涼みが戀しくなつてきた。急に色々のことが想い出されてきた。出發以来朝日、毎日等の新聞を一度も手にしたことがない。長男から重要な記事の切抜を送つてきたので、大体の動きは理解することが出来たものの、詳細なことは少しもわかつていない。スイス、コーの大会に南方からマミー夫人という一人の女性が来ておつた。その名をきくごとに、朝日紙上「花の素顔」の麻美の名が浮んできた。劇中の人物ながら、いわゆるピボウと才氣がアダとなつてハイタイ、身を亡すに至らないことを願つていたが、作者はど

う始末をつけたであらうか。毎日紙上の入営青年葦原君は、だいぶイジメられておつたが、どうなつたか、石川達三君に彼れ青年を幸福にしてやつてもらふことを望みたかつたが、これもどうなつたか。

☆

同胞の好意によつて、雪のロッキーマウンテンと、氷河のタコマ富士を眺め、明日はヨセミテに登る。特に同胞先輩は車を提供してくれるばかりでなく、自分で運轉案内してくれた。同胞なればこそと涙が出てくる。十一日の夜サンフランシスコにつき、十四日空路ハワイに向い、十八日に同地出発。いよいよ廿日には二カ月と三週間目でなつかしの祖国へ歸ることとなつた。色々の感想が一時に胸につかえてきた。思えば全く忙しい初旅であつた。思つておつたホンの一部分しか観られなかつた。会いたい人にも会えなかつた。なんとなく残り惜しい気がしてならぬ。さて、私の探しに行つた青い島は果して探し得たか、あるいは見つかつたか、とり逃したのか、それとも全然探し得なかつたのか、どうしたのか——これに対するお答は飛行機が羽田についた時に申し上げることしよう。

ハワイを訪れる

八月二十日午後二時に羽田空港へ着くという豫定であつたが、ウエーキ島からの太平洋北上は少し荒れ、二時間ばかり遅れ、午後四時半にやつと着いた。やつぱり故国はなつかしいものだ、富士山は一ばん最初に見えるというがどうか、曇つて見えないとすれば、今日はどこの山が見えるのだろうか、目をはなさずに、小さい窓から外をのぞいた。雲が多いので、美しい、あこがれの富士山は姿を現わさず、伊豆の山々がさきに見え出した。まあ無事に帰ることが出来たという気持で一ぱいだ。

五月三十一日に出発して空路を北にとつて以来二カ月と三週間ぶりである。行程実に三萬哩、想えば早いものだ。だいたい空路は快適の旅であつたが、とりわけ八月十四日サンフランシスコ出発のハワイ行は、全行程中の最も気持のいゝ空の旅であつた。

飛行機は最新式、天氣は上々、すべるように太平洋を一気に飛んだのは、忘れ難い愉快な記憶であつた。ホノルルでは多数の同胞の出迎えを受けたが、まつ先きに驚かされたのは、くる人もくゞ挨拶をしながら花環(レイ)を自分達の首にかけてくれることであつた。御好意有難いが、十個も重ねてかけると、襟巻をしたようで暑い。ハワイは七島から成り、日系同胞十七萬人と言う。内、第一世は二萬人、あとは二世三世、なかには四世も出来ているとのことだ。米人経営のパイナップル工場を見学に行つたが、全部近代的機械化されているのに驚いたが、今一つの驚き、否感心したことは、女工さん約二万人は各国系の人々で、仲よく作業していることであつた。日系、中国系、ヒリッピン系、アメリカ系の中、経験を積んだ娘はそれくゞ監督さんになつて、多数の女工を指揮している。まさに、国際工場の観を呈していた。人種を超越した国際島の特色が面白く現われている。

日系商工会議所福永会頭の案内で眞珠湾を見物に行き、当時の有様を実地で説明して貰う。どこからもまる見えになつてゐるさらけ出しの軍港である。十二月八日を想い出しては暗い気分が胸につかえて来た。日系有志諸君の歓迎会を疊の座敷で開いてくれる。久しぶりでアグレをかいだが、矢つ張り落ちついてうれしかつた。そこへ同郷の人が鯉のとりたてを刺身にしてもつて来てくれた。アメリカで度々サシミの御馳走になつたが、このカツオの刺身は、これ等に比べては段違いである。味といい、色といい、なんとも言えぬうまさであつた。同胞の好意はうれしいものだ。わけても、この同好の友は私どもにカツオの刺身を喰わそうと、朝から大騒ぎであつた。多謝多謝。

世界地図ではハワイは一寸、点を打つただけで、絶海の孤島、風浪にさらされている小島位にしか考えてなかつたが、こゝへ来て驚いたことには、なか／＼面積も広く、富士山程の山もあり、真夏なお雪を頂き、山腹でスキーが出来ると言う。ハワイまでは日本内地人もドシ／＼遊行の出来るように早くしたいものだ。そして、その文化をまず学生の修学旅行で見せたいものと思う。二世諸君も色々と奮闘し、縣會議員数名を出し、今回は議長

を日系で獲得し、大いに気を吐いているということであつた。なお、ハワイは州でなく、アラスカと共に政府直屬の縣である。従つて、代議士はまだ出せないのは氣の毒である。色々の会合を開いてくれたが、集まつてくれた人の中には、私の知人の親戚友人が意外に多かつた。成程ハワイは日本に近い、はや歸つたと同じ感覚をもつのも無理はない。

私の探している青い鳥に就てのお話は次の一句にとめたい。

青い鳥羽田でまてり風かおる

青い鳥は外国のどこにも居なかつた、スイスにもアメリカにも居なかつた、やはり手近の日本に居つた。私は羽田に着いた時に、次の感想を発表して、青い鳥のお答をした。

☆

二カ月と三週間目で外国から歸つてきた感想は、第一に各国とも戦争にはもうこりこりしているということだ。戦後の速かな復興を念ずる西欧州においては、混乱と破壊とは絶對に避け、国民は平和と建設に進みたいとしきりに要望しているのみならず、この世界の平和と建設は独裁専制を排し、民主的に実践することが必要だと主張している。

第二に、これは国民が共産党のやり方をきらつたため、西欧においては共産主義は下り坂で峠をこし、いまや衰退期に入りつつある。東欧においても脱出者、脱落者が増加する傾向にある。

第三に、それならば保守反動時代来るかといへば、全くらち外におかれている。ことに独占資本主義の政策は大幅に修正されて、社会民主主義に近づきつゝある。ことにアメリカは社会政策に徹底するとともに、フェアディールの線を通じて資本の圧迫を排し、大衆生活の擁護にむかっている。こうして保守反動は国際的に孤立し、置きざりにされている。英国の資本主義に後もどりすることはないというのが大衆の声であつた。

第四に、社会民主主義こそは世界平和と戦後再建の世界の世紀的スローガンである。西欧諸国はこの一線によつて政権を担当しつゝある。第二次戦争後の民主主義が新しい内容をもつて提唱されたと同時に、この社会民主主義も理論の時代から実践的イデオロギイの時代に入つた。こゝに新しい意味があり、戦後の新しい力として平和と建設の政治原理として認められ期待されている。西ドイツ、フランス、イタリアの政情が共に極右極

左を排し、平和と建設とを目標とする社会民主主義の方向に進もうとしていることは、有力にこの事実を物語っている。私は特にこれら三国の政局の進展に、大きな意義のあることを感じた。

第五に、社会民主主義は世界に多くの友をもっている。私は日本社会党の今後の国際的連携を希望したのに対し、非常な好意をもつて迎えられたが、わが国も国際的孤立を避け、世界の大大勢に順應して進む必要を痛感した。

第六に、私は民主主義の基本を何に求めるかを研究したが、その結果やはり土台は遠くにあるのでなく手近にある。各国民はそれらの歴史と国情とを尊重して、その立場から一歩再建へとまい進している。すなわちその国の歴史と国情と国民性とがその国の民主政治をきめるについての第一の基本となる。そしてこれをきめるについての第二の基本、すなわち民主主義の背後にあつて、これを強化するものは社会主義と平和主義であることを信ずる。

第七に、日本社会党も幾多の経験を経た今日、理論より実践へと進むべきである。再建

の理論は社会民主主義より以外にないのであるから、党一本の姿を強化し、協力一致進む必要がある。私はこの所信に向つて黨員とともにいて身したい。私は青い鳥を探したが、やはり手近にあつた。すなわち我々国民が国情と歴史とにより創造する新らしい「社会民主主義」である。

印象に残るもの

各国人をそれ／＼の特色に應じて、どういふ工会に表現すればいゝか、色々と考えて見た。そこで私は、次のシンボルがこれを現わしていると思う。スイス人は花を愛する国民である。平和国民たるにふさわしく花を愛する国民である。住宅の悉くの窓に花の鉢を出して、自分も楽しみ、人にも楽しませる。独逸人は音楽を愛する国民である。私どもが飛行機で西ドイツのデュイスブルグに着いたその晩に、はや音楽会に招待をしてくれた。久しぶりで聴く本式のコンサートであり、心の強く打たれた宗教音楽であつた。会場も非常

に嚴肅な気分には溢れていた。ウエストフアリア前首相アーノルド博士の招待会に出席した時も、独唱とピアノ独奏をきかせてくれた。これは二、三の例に過ぎないが、なんとなく寡困気がコセつていないで、晩には音楽でもきいてという気持である。ゲーテ二百年祭に当つているので、その事蹟を是非とも訪ねたいと思つたが、果し得ず、今でも残念である。今一つはラインの風光を賞する機会を逸したことも惜しい限りである。

フランス人は画を愛する国民である。ルーヴル美術館や、プチパレーがあるからではなく、巴里に入ると美術館へ行つて見たい気になる。陳列されている画は名画中の名画ばかりであるが、我々素人眼にもイタリー、フランスの大家の外、ルーベンスの母子像や、ムリリョの乞食の子など、心のひかれるものが沢山ある。石井柏亭画伯がこのムリリョの乞食の子の画が非常に気に入つているという記事をかつて讀んだことがあつた。私もその画はがきを買つてきた。成程、画はホン物を見なければ、その筆の運びや、色の工合を研究することが出来るものではないと思つた。画家諸君は、是非巴里へ行つて世界的名画を直接見る必要があるであらう。

巴里で特に感ずることは、彫刻立像の多いことである。それが街の通りとうまく調和しているのが、まことに面白い。須田町の広瀬中佐の銅像はなんとなくゴゴチなさを感じたが、場所の選び方、附近の建物との調和なども考えて建てて必要がある。その建て方がいゝと街の美観になるのみならず、いゝ飾物にもなり、且つ文化的施設として実に立派なものになる。巴里で、小島、荻須両君の案内により、レピューを観に行つたが、なか／＼面白かつた。東京でもめつたに観たことがないせいでもあろうか。頗る上品で、しかも皮肉と警句に富み、文化的要素も多分にあり、大衆的なものとしての興味も十分にあつた。一例を上げると、舞台が開くとすぐ青年紳士淑女が一人ずつ出て来て、近頃の絵画には余りいゝものがない、昔のものはやつぱりいゝと言うと、舞台に一つの名画が写る。これを眺めた青年男女は、名画は何時見てもいゝものだと言つて賞める。しかし、なんとなく物足りないところがある、これに活動的な部分を補充すれば申分はないネと話し合つると、この名画は俄然、動き出してくる。二人は又、活動的にはなつたが未だ近代感覚が乏しいとかこつと、今度は画中の美人が着物をぬぎ裸体となるという趣向で、観客は大拍手を送るのであ

る。エロ一点張りのわがレビュー界も大いに研究し、文化向上を圖つて貰いたいものだ。

☆

英国民は実に地味であり、常識的である。ロンドンの霧、ロンドン紳士の黒服、全くジミであるが、万事が常識的であり、堅実である。黒の山高帽、黒服、コウモリ傘の紳士をよく街で見る。元首相チェンバレンの再来かと思われる英紳士は、何時霧が雨になるかもわからないので、用心にコウモリ傘をもつて行くのであろう。万事その調子で用意周到である。紹介がないと紳士も人に会わないというし、初対面のとりつきも余り愛想がなくてわるいが、よく話をしてみると実にこだわりなく、親切であり、義理がたい深みがある。

ロンドンには十日間くらは居りたかつた。労働党、労働組合は勿論のことであるが、華々しき論戦のある英議会、その他の政客をも訪問したかつたが、なにしろ制約があるものであるから、止むを得なかつた。わけでも国民画堂に、たつた十分間、閉鎖寸前に飛びこんだのは寧ろお笑草とでも言いたいところだ。殊にヴァン・エイクの有名な伊太利の商人夫妻を画いている圖をみたいと思つた。これを写真で見ると、夫の帽子は馬鹿に大き

く、毛皮の外套も立派であるが、夫婦が握手をしているカツコウが如何にもおかしいので、本物を見たいと思つたのであつた。割愛して、朝日新聞社福井特派員にたのみ、写真帳を買つて来ることとした。

シェークスピアを批評したある人の言葉の中に

「エボン河上のストラトフォードという小さな田舎町に生れ、ほんの小学校程度の教育を受け、二十歳ころにロンドンに出て、色々の職業にその日を送っているうちに、いつとはなく劇場に出入し、こゝに最もふさわしい職業を見出したのであろう。まず俳優としての技倆を示し、やがて二十六歳のころから、劇作に向ふこととなつた。かくて文筆に精進すること二十三年、その間に長詩二篇、十四行詩百五十四篇、悲喜劇三十七種を創作し、四十九歳で、早くも筆を折つて故郷に退隱し、五十二歳で尊敬すべき紳士としてこの世を去つた……。彼にはダンテの宗教なく、ゲーテの哲学なく、靈の高調と智の思索から成る時代の子ではなく、あくまでも尋常人間の詩人である。しかし彼の観察は広く、彼の把握は強い。小さな公衆でも逃さず、いかなる場合にも公平を失わない、：

…この人ほど人間を知り、人間の動き出す大ぜんまいを、しかととらえた人は他にはないであろう。」

沙翁を評して十分と思う。常識的で、無理のない、しかも総てを握っている特色がある。私はストラットフォードで二泊した。色々事跡を探る外に、マクベス劇を観た。私は日本の歌舞伎と比較しながら考えた。マクベスがやられる最後の場で、

マクダフ　今さら何も言う必要はない。

総てはこの剣に集まつている、不屈至極のこの悪党め。

マクベス　そんなことをしても無駄なことだ、空気がかりを切つてドウするのだ。

貴様の得意の長剣でもオレのカラダに当つて血を流すなんてことはとても出来まいぞ。

刀をやたらにふり廻すなら、オレの頭のとつ辺でも目がけて切りつけろ！

このあたりのセリフはなか／＼鋭い。歌舞伎式の長くセリフを引つ張る左團次、幸四郎劇に馴れている日本人には少々物足りない気がする。コンナ盲評をすると、逍遙先生にす

まないように思う。

☆

ロンドンで在留同胞五十数氏の招待を受けたのはうれしかつた。殊にグラスゴー行き
の汽車弁当に貰つたお寿司は、久しぶりの日本飯で、一同舌鼓をうつた。それがアメリカに
来ると、段々と同胞の好意が身にしみて、なつかしさと感謝とで一ぱいになつた。ワシン
トンでは時間が少なかつたので、ほんの一時余りしか懇談の時をもたなかつた。ニュー
ヨークでは、はじめて日本料理「都」の主人公特別の骨折りで盛大な歓迎会を開いてくれ
た。その外シカゴ、デンバー、シアトル、ロサンゼルス、フレズノ、サンフランシスコ等
で、盛んな会合を開いてくれたのは感謝の至りであつた。私も多数の同胞を前にして、日
本の現状と将来と題する講演をなし、大要次のように話してきた。

日本は無理な不法な戦争をして、今や敗戦のドン底につき落された。我々はこの敗戦
を深く反省し、日本を敗亡へと導いた一切の原因を断ちきり、新らしき日本再建へと進
まなければならぬ。戦場で散つた若き同胞の犠牲献身を無駄にしてはならぬと考える。

こゝに民主主義による日本、平和主義による日本が生れてくる理由があり、又それを健全に育てあげなければならぬ国民的責任がある。

この意味に於て、新憲法の精神を諸君はまず深く了解して、民主日本の進みつゝある現状をよく知らなければならぬ。日本の財政、自治制度、行政機構、家族制度、労働組合の動き方などにつき、大略の知識をもつ必要がある。(私はこれを詳細に解説した)かくして新日本の進むべき道は既に定まつた。すなわち日本は徹底せる平和国であると共に、日本の政治は民主主義によるものでなければならぬ。この平和と民主化を実現する基礎は、実に健全にして建設的なる社会主義であるを要する。これこそ社会民主主義である。戦後の平和建設の政治理論は、この社会民主主義でなければならぬ。これは勿論、共產主義と大違いであり、保守反動とは大いに闘うものである。私は平和日本のためにこの社会民主主義をふりかざして大いに奮闘する。諸君の奮闘せられている市民権獲得問題、移民、通商の自由も一に祖国日本の国際的信用が上り、日本民主化が前進し、一日も早く国際社会に仲間入りをすることが出来るや否やにかかつてゐる。講和会議の

早く開催せられる要件も一に日本民主化、経済自立問題にかゝつてゐる。我々はこの社会民主主義を基本としてのみ日本民主化は前進することと信じてゐる。

と述べた。

在米五十年、六十年にわたる大先輩をはじめとして、二十年前後の同胞諸君も、母国日本研究に熱心な二世諸君も、皆よく聴いてくれた。日本の事情を知りたい、今後の日本はどうなるか、心配でたまらないという同胞各位の心中を察して、私はだいたい一時間半、汗だくの講演を行つた。静聴を心より感謝している。あとの座談会の際、ある青年は「我々は財的救援以外に日本民主化促進の後援会を作ろうではないか」と発言された。私も感謝して、その協力を求めておいた。

私の母校田辺中学の先輩、松本民三君は滞米四十八年という経歴をもつ。ロサンゼルスから特にフレスノに廻つたのも、この松本君に会いたかつたからである。会つて同君の長きにわたる在外奮闘を感謝し、且つ激励したかつたからである。同君はブドウ、桃の農園をやつておられる。同君の家庭を訪問し、とりたての桃、ブドウの新らしいおいしいのを

御馳走になつたことは、四十八年ぶりの面会と、温き友情と共に深い感銘であつた。

アメリカにきてから、多くの同胞に会つて、なつかしさを覚えたが、更に旧友や和歌山縣人会の諸君に会うと、なお一段と親しみを感じた。先方でも身近なものと感じたらしい。なるほど外国に居ると、縣人会が親類のような氣持になるというが、人情があらわれて奥床かしい。

☆

歸つて来て親しい友達から、どこの食事が一番うまかつたかと聞かれる。食道樂、飲道樂のない私には甚だ無粋と言う外はないが、どこの食事も、大たい同じ水準に達していると思う程うまかつた。文化の程度がこれを引き上げるのだろう。特にとり立てて言えば、スイスのチーズは実にうまかつた。スイスのコーでは、毎朝必ずチーズを出してくれらる。白色で臭味はなく、如何にもカロリーがありそうで、味が実によかつた。私がスイスのシンボルは花であると言うのに対して、スイスのシンボルはチーズだと言つた人がある程だ。あるドイツ人が私に、「自分は日本語を知つている。チーズ、バター、ミルク、ラ

ンプなどだ」と。なるほどチーズは外国人の知る日本語の筆頭になつている。

ドイツ、フランス、イギリスなど、それ／＼特色の料理があり、うまいものが沢山あるようだ。ロンドンのベーコンはわけてもうまいと言うが耐乏食のロンドンでは、うまいベーコンも少く、意気なフランス料理も戦後経済難局では、それらしい御馳走にもあわなかつた。ドイツでは、州と市、会社と労働組合など、各方面の会合に出席したが、再建ドイツを目ざす意気込みか、質実を旨とする料理であつた。そこへくると、アメリカは如何にも新興の気運みなぎつて、建物といわず、食事といわず、何から何までハツラツと動いている。私はアメリカの果物が大變うまかつたので、毎朝トマトジュースをスープ代りに貰つた。歸つてからでも、トマトジュースはほしいと思う。特にハワイは果物の実に豊富などころであるが、また実にうまい。欧米人はがいして酢ばいものが好きのようだ。キウリの酢漬けを好むようだけれども、我々の口にはとてもあわない、飛び上る程の酢つばさだし、また多くの料理にレモンを盛んにつかう。それを非常に愛好している。酒のことはよくわからないが、こんなことがあつた。ドイツで我々が炭坑から真つ黒になつて出て来

た時に、私は真つさきに手を洗い、うがいをしたかつた。ところが炭坑長はこれを止めて、「これを飲みなさい、口の中にはいつている石炭の粉を外へハキ出さないで、この酒で腹の中へ流しなさい、少しも害にはならない、私共は毎日それを繰り返している」と言うのである。人々は並んで如何にも、うれしそうに、小さい杯でコクテルを飲み、かわいたノドを潤している。上原君も自分の分を飲み、私の分まで飲んでニコ／＼している。実にうまい／＼と一同大元気ではいやいだ。私は止むを得ず、サイダーで飲み下したが、この時ばかりは酒飲みの效能を感じた。

どこのコーヒーも実にうまかつた。殊に朝食の時には格別のうまさであつた。妻も上原君も大のコーヒー党になつたが、私は矢つ張りお茶党である。ロサンゼルスに来て、香りの高い番茶のご馳走になつたが、久しぶりに味わうなつかしいハウジ茶の香り、私はもはやわが家へ帰つたような気持になつた。牧水の歌に

あかつきの寝ざめ静けき心もてすゝり味ふ茶にしかめやも

私は酒をのまないが、茶にしかめやも、という心持は同じである。日本人にはお茶の方

がいゝと思う。否私にはハウジたての番茶の香り、何よりの好物である。

駄作ながら左の一首をもした。

空の色風のかおりは變らねどわが家にて飲む茶にしくはなし

☆

景色のいゝところを沢山みたけれども、一ばん気に入つたのは、ロサンゼルスの南国情緒であつた。ヤシや棕櫚の並木には、捨てがたき風味があり、我々にはすこぶる珍らしいので、暫く立たずんで眺めていた。蘇鉄もすいぶん大きいのがある。日本のは高くならないが、ロサンゼルスでは、蘇鉄も棕櫚と同じくらいの高さに延びて大木となり、堂々道路を圧するという風光である。私自身は南国紀州の生れのせいも、南の方の景色が好きだ。鹿児島から眺める桜島の偉容というか雄姿というか、堂々たる大きな眺めはなんともいえぬ悠々さがある。これ等の景色を想い出しては、このロサンゼルスの南国風景を楽しんだ。それが、ロサンゼルスからフレソノ附近にかけて、見渡す限り広茫たるカリフォルニアの原野に通ずるので愉快であつた。山紫水明のスイスよりも、大自然に接するロッ

キー山脈よりも、このロサンゼルスの椰子の並木が好きになつた。殊にハリウッド一帯は南国気分の濃厚なものがあつて、是非もう一度、ゆつくり見たいものと思つた。桜島のことを言つたが、宮崎縣の青島、高知縣の室戸岬なども南国色の濃いとこで、私は二、三度行つたことがある。このつぎ旅行の機会が与えられるならば、南方マレー、安南、セイロン、フィリッピン等へ行つて見たいものだ。

そのつぎに氣に入つた景色はパリ附近の美しい森の眺めだ。歴史的なコンピエーヌの森に是非行つてみたいと思つたが、時間がなくてやめた。全くパリ郊外の森と、その中に点在するお城との調和は、さすがに森の都にふさわしいものがある。にわか造りのケバくしさなどなく、それ自体美しい画になる緑の眺めであつて、その風光は忘れられぬよき記憶であつた。最近京都と奈良とへ行つたが、このパリの森に比較して、まことに森の少ないのを残念に思つた。もつとも京都には東山あり、奈良には三笠山があるけれども、森は森、街は街という工合に、それ／＼別々になつている。森の中に街あり、街の中に森があるパリはやつぱり美しい。急に北京とローマとを覗きたい氣がしてきた。調子にのつて、

旅行気分浮かされてはいけないことだと自ら叱りつゝも、文化の都、藝術の森と都とは切つてもきれぬものだと思う。文化の京都と奈良とをまもるために、是非この森を美しいものにしたいものだ。

☆

見落したところの沢山あることはたび／＼書いたところだけでも、特に惜しいと思うのが三つある。一つはラインの風光、第二はウィルヘルム・テルの事蹟、第三はアメリカの近代科学の威力TVAである。第一のことは省略しておこう。第二のテルの古跡は是非スイスに居る間に行きたいと思つたが、縁がなかつたのであろう、上原君だけ行くこととなり、私達夫婦は他の道を廻つたので、テルの記念碑を見損つた。そればかりではなく、アルプス・ユングフラウの千古の壯観、氷河を視る機会を逸したことも遺憾であつた。ウイルヘルム・テルは私にとつて印象の深いものである。それは、学生時代にYMCAの建築基金を募集するために、観劇会を開いたことがある。その時の共題が、シルレルのテルであつた。のみならず、高等學校時代にドイツ語の参考書としてこのテルを研究したこと

がある。重ねがさね、是非廻りたいところであつた。こゝにテル・デンクマールの写真だ
けでも入れて申訳としておこう。日本の佐倉宗五郎といふべきテルが代官の圧迫に抗し
て、農民大衆のために闘い、愛児の頭上にのせたリングを見事射とめた当時の悲壯な表情
がよく現われている。

次はTVAを見損つたことである。スイスに居る時でも、水力電気のことを特に研究し
ておきたいと思つたが、その機会がなかつた。アメリカに来て、米人からも、在米同胞
からも、是非近代的威容を見学する必要があると強くすすめられた。また写真も見せられ
たし、説明もきかされた。ところでそれを参観するためには、豫定の犬變更をしなければ
ならぬので、これも割愛した。ところが最近、私が神経痛で阪大病院に入院している際、
旧友古野周蔵君が見舞に来てくれて、リリエンソール著、和田小六訳のTVA（民主主義
は進展する）を見舞品として届けてくれた。そこでその本の見出しに書いてある要旨だけ
でも摘記して紹介にかえることとしよう。

テネシー河域公社TVAは世紀最大の総合的開発事業である。科学と経済とヒューマ

ニテイーとの見事な融合であり、恐慌、失業、荒廃と戦うアメリカの進歩的知性の輝かしい記録である。TVAは鉍毒や洪水のために死土と化したテネシー河域を沃野に返すために、治水、発電、開発、運輸、その他の社会施設を行い、沢山の大作のダムを築き、莫大なる電力を生産したる近代的事業であつて、これは、生産の増大によつて社会的幸福を推進せしめたものである。天然による破壊を科学的計画性による建設によつて美事克服し得たのである。云々。

私はフランス通信に書いたと思うが、ライン、セーナ両河流域の欧州平野は自然に恵まれ、従つて文化及び産業は、早く発達したことを思う。このことは歴史の示す通りであるが、アメリカは自然を克服しつゝ、近代科学の力を以て人間生活のために物質を征服しつゝ進んだのである。その一例として、飛行機、自動車等を擧げているが、実はもつと大きなものが外にあるはずだ。即ち基礎的となる開発事業を擧げた方がいゝと思う。そのためには、このTVAの大ダム工事を説明しなければならぬであらう。私はこれを見る機会がなく、説明をきいただけで歸つてきたが、これから視察される人々は、是非、この世紀的

大事業を視る必要がある。この本の中には色々書かれているが、その一節に「合衆国聯邦議会在、テネシー河流域公社にこの河の資源を開発する仕事を課してから十年の間に、放浪定まりなかつたこの河が、今では美しい広々とした幾つかの湖水をつらねて靜かに流れる河に變つて、住民を喜ばせるのみならず、昼夜を分たず電氣のエネルギーを起し、人間の負担を軽くし、新たな肥沃に恵まれて青々と天日の下に生きかえり、文化と産業とにより平和なる世界を建設しつゝある。」台風に見舞われる毎に、交通、通信ともに杜絶し、停電、断水のみならず、洪水、山くずれのために多大の被害のあるわが日本、特に主食米作が毎年、これ等の天災のために、おびやかされている。こんなことでは文化も産業も發展しない。この自然を克服するに科学の力を集結しなければならぬ。私は強くこれを感じるものである。

社會民主主義を求めて

「共産党はすでに下り坂にはいつたことが、はつきり認められた。だん／＼人氣も落ち、大衆にきらわれ出してきた。」これが私の欧州共産党に対する答である。鉄のカーテンの東の方は別として、西欧全土の共産主義はすでに峠を越して、衰退期に入ろうとしている。きくところによれば、東欧地方でも強圧をいやがつて、西方へ逃げ出すものが相当数に上つてきているという。現にドイツで逃げ出してきた青年に出会つたが、自由を求める青年にとつては堪えられない苦痛だといつておつた。

共産党が衰微しつゝあるその理由は、つぎの二つにまとめることが出来る。一つは混乱と破壊を望み、そのスキに乗じて暴力革命を圖ろうとする指導精神が、次第に大衆にいやがられてきたからである。組織的大理論があるかと思つた青年達は、研究するにつれて、極めて単純なる一本調子のプロレタリアートの政權獲得だけであることが、明白になつてきたのである。理論と称しているものは暴露戰術以外に何もものもなく、支配階級の信用を失墜せしめる戰術というのがあるそうだが、それは混乱と破壊とを招くのみで、結局は大衆が困窮することとなるだけだ。そのような混乱と破壊とは大衆にとつて眞つ平である。困苦欠乏を來たした戰爭で、大衆はコリゴリしているのだから、一日も早く平和と建設と秩序に進むようにしたいというのがすでに常識となり、異口同音の要求となつてゐる。

いま一つの理由は自由、民権の尊重が政治の基本であるにも拘らず、これに反対の独裁専制政治をきたす共産主義は、独裁の点において断然お断りしたい。我々は現在直ちに自由、平等、平和を守つてくれる政治を要望するのである。この意味から一階級の独裁政治に絶対反対であり、そのためプロレタリアート専制政治には御免を被りたいと強調してい

る。色々の説明はあつても、独裁専制政治は根本的に排斥されている。各国を通じての国民の声は、再び戦争を起すようなことがあつてはならぬ、戦争は人類の不幸だから、今直ちにその防止と世界平和に努力しなければならぬ。そのためには国民が自ら政治をする建前をとることにしよう。少数者には委せられない、一階級の専制政治はお断りだという要求が高い。すなわち、過去において事実が證明する通り、あらゆる意味の独裁政治は全部失敗だつたから、今後とも独裁者に政治を委すべきでないという要望が非常に強い。すなわち、戦後の新政治は国民自らが政治をしようとするのだから、何よりもまず混乱と破壊を避け、同時に一個人または一階級の独裁を排し、平和なる世界を建設的に民主的に進めて行こうとする、これが平和国建設だといつてゐる。従つてこれと逆行する共産主義は、今や時代の大きな要求により食い止められ、だん／＼と衰退期に追い込まれつゝあるのが実相だ。

然らば保守反動の時代来るかといふと、これも相手にされていない。戦後の世界は新しい力をさがしている。新らしき革袋をもつてこなければ、新らしき酒は入れられない様

相だ。世界は保守反動を出もどりの時代錯誤者として取扱ひ、これを置き去りにし、グン
グン前進しつゝある。欧州においては、国粹的、独占的資本主義政治を復活しようとする
空気などは全く見られない。全く保守反動はその影をひそめつゝありというところだ。

なるほど、反動一派は反共の旗印を高く掲げておつた。しかし、反共闘争は保守反動で
はやり得ないことが段々と判つてきたとともに、理論的にも実践的にも反共闘争は、社会
民主主義をおいて外にないことが一般に認識せられ、その理論なくしてはさらに右へ立
てこもつて、保守反動の陣営より、反共を叫ぶこととなると、自分自身がますます極右化
し、ナチスと同じ最後の運命に追い込まれることを知るに至つた。そんな無理論の反共闘
争はいたすらに暴力化、極右極左の対立激化を來たすばかりだと悟るに至つた。こんなこ
とが保守反動を時代から置き去りにしたのであろう。

☆

戦後の政治は、大衆の生活をあらゆる独裁から擁護すべしという見地が表明されること
となつた。この意味で、労働問題が大きく取り上げられ、大衆生活問題たるばかりでな

く、大きな一国の経済、産業問題となり、さらに政治問題、国際問題の大きな要素となるに至つた。これを有力な問題としないことには、今の政治問題が生きてこないのである。米國トルーマン大統領のフェアデイール政策、タフト・ハートレー法の廃止のごとき、明らかに資本の支配から大衆生活を擁護せんとする政治理念をしめすものであつた。これに触れなかつた、否あるいはふれることを避けたデューイ氏の失敗も当然であつたといわれている。英國労働党の社会主義は空論ではなく、大衆の生活に食い入つた切実な政策だと認められたために、大衆の深き理解が増大して無理なく進行しつゝある。英國保守党も今日においては、もはやこれを全面的に後もどしはしないであろうといわれるところに、時代の大きな力と流れがあるわけだ。欧州本土においては、すでに国粹的・反動的、独占的政治活動をなさんとする人々は、全く孤影悄然というところだ。世界の趨勢からみて、保守反動は全く時代の錯覚者であるとともに、國際的孤立者となり、世界に友なき独りよがり者となつてゐる。

欧州のキリスト教社会主義党、または人民協和派はなか／＼強い勢力をもっている。ドイツCDP、フランスMRP、イタリアおよびスイス人民共和党などは、社会党と並行して時局担当の中心勢力となつてゐる。八月十四日舉行の西ドイツ・ボン新憲法による最初の総選挙の結果がどうなるか気がかりであるが、フランス社会党もフランス政局を混乱と破壊から救うために、人民共和派などと提携して、連立内閣に参加している。イタリアの政情も色々と議論はあるにしても、現首班ガスペリの人民共和派と、サラガットの社会党とは連立をつづけている。それが共に破局を救い得るための、やむを得ざる処置だと考えてゐる。理想的でないにしても、このやり方は大衆に深く理解せられてゐるようだ。

人民共和派はやかましい指導精神の下に統一せられてゐる政党ではなく、極めて楽な気持ちで一党を組織してゐる政党である。大体この党は保守派といわれているが、いわゆる保守反動ではなく、人道的立場に立つ正義派、自由民権論者の集まりというのが適當である。もちろん、反共であるとともにまた反ファッショ、極右独占資本主義を排する穩健中正派である。これらの思想および傾向を代表するものは、イタリアのガスペリ首相、急進

社会党のエリオ長老、ビドーマン党首、およびクイーヌ首相、シューマン外相などである。ごく端的にいえば社会主義政策を理解し、社会民主主義の大きな線で進むことで協力する進歩的な人々であり、社会政策を大幅に実現することに熱意をもっている学者、また有識者であり文化人が多い。この政党は戦後の再建、平和の実現につき、民主的社会主義政党と協力しているのである。シューマン外相に会うことが出来なかつたことは残念だが、佛独関係の調整、世界平和のため、全力をつくすべしと主張していることをきいて、その政治の方針をも知ることが出来たのである。これらの傾向は戦後の政治に大きな役割を演じているのみでなく、また歴史的意義の非常に深いものである。

☆

混乱と破壊とを排し、独裁専制を退け、一路世界平和と建設へと進むには、社会民主主義あるのみとの私の信念は、いよ／＼かたまつて来た。世界各国の社会党の主張は、この点で一致している。マルキシズムから発足しようが、フランス社会主義観念に立脚しようが、英国社会主義、フェビアン主義を土台としようが、まとめられた結論としては民主的

に社会主義を行い、資本主義機構の中でもドシ／＼と社会主義政策を実施して、民主主義の徹底化の上に社会主義を建設しようとする方策が強く出されている。しかも国民民主権の政治形式は議会主義を最も適当とするから、一切の独裁形式は絶対に排撃されている。

議会を権威あり信頼される機関としたい気持ちも非常に強く、従つて選挙制度も公正にして、国民の総意を反映するにふさわしいものにすべきは当然のことと考えられ、買収などはあり得ないことと思つている。

☆

私が平素から考えておつた通り、この民主主義は必然的に平和主義を伴うものである。連れ立つ民主主義、平和主義が不可分の関係で、あらゆる面に浸透することによつて、産業民主主義となり、また経済の民主化をも促進し、最後に社会主義を實踐せしめるに至るものである。この民主的に平和的に行われる社会主義、すなわち社会民主主義は科学的合理的のものであり、同時に国情に即し、無理をしない道義的のものであるから、混乱と破壊とを排するためには、最もよきイデオロギーとして次第に大衆の深き理解が進みつゝあ

りと信ずる。西欧民主主義またこの線によつて進みつゝあることいふまでもない。

英国のラスキ教授は世界における大きな出来事として、キリストの生誕とロシア革命を擧げたようであるが、まことにキリストの生誕は欧州文明、否、世界文明に大影響を与えた大きな出来事であるに相違ない。私は学生時代に厨川白村の「世界二大潮流」を読み、かつ話をきいて大いに感服したものであつた。ギリシア思潮とキリスト教思想、肉體主義（白村の言）と精神主義との対立によつて、文明が進展したことを解明し、かれは藝術の立場からギリシア思潮を大におう歌しておつた。戦時中南原東大総長がナチス理論の淺薄なることを痛快に論難し、歴史的事実と理論とに基かないナチスの政治原理は、やがて崩壊するであろうといわれておつた。その見解に私は大いに共鳴したものであつたが、いま欧州の一角をのぞいて見るに、依然として二つの潮流のあるのを見ることが出来る。

もちろん第二次世界大戦争という大事變に遭遇した後のことであるから、二潮流は歴史的経過によつて、その様相に變化を來たしているのは当然のことであるが、大たい今のところ、時代遅れの保守反動は別として、西欧民主主義によつて一括されている社会民主主

義の線と、唯物論を中心とする共産主義の線とに大別される。この西欧民主主義の中には、クリスチャニティーと社会民主主義とに分れるであろうが、政治的には社会民主主義の線でまとめられて、共産主義に対立している現状である。今度の西ドイツの八月十四日の総選挙では、西欧民主主義派が勝つて、東欧主義による共産党は当然敗北の結果となつたが、この西欧派の中には前にいつた通りSPDとCDPとがあるけれども、思潮の分野においては、民主派と共産派とに大別せられる。

ヨーロッパに来て驚くことの一つは、到るところに教会の立派な建物がそびえていることである。コーのような山上の小さな村でも、カソリックとプロテスタントの教会がすぐ近くに並んで建っている。コーの下のグリヨンのカソリックの教会へ行つて見たが、常に一ぱい礼拝者がひざまずいて祈りを捧げている。若い青年男女がなか／＼多い。グリヨンはコーより少し大きいかと思われるほどの村であるが、教会の盛んなものには驚いた。私は大たい自動車を飛ばしてまわつたが、行くところ教会のない村はない。例えばチュール

ヒはドイツ語を話すところで、南ドイツと同じだというが、その辺はなおさら教会の数が多かつた。ことにこゝは宗教改革の発祥地であるから、カソリックとプロテスタントが大いに併立している。

そこで私の感想は二つ出てくる。その一つはキリストの十字架が欧州人の心の底に深くはいり込んでいるということ、第二はそれがさらに進んで政治の上に強く影響を及ぼしているということである。言葉をかえて言い直せば、キリスト教の精神が欧州文明に強い根底を作っていること、欧州文化はキリスト教の影響を受けていることである。とくに教育制度は非常に特色のあるものとなり、それがまた政治問題化したことも顯著である。これらの歴史的事実は決して見逃すことの出来ぬことである。

☆

齋藤勇君の米国講話をよんだことがある。金と物との大きな動きの中に、どことなく米国人には、ピューリタンを尊敬する道義心と、新らしい所へグン／＼進んで行こうとする開拓心とが流れているということであつた。面白い観察と思つたが、今、私は米国におい

て物を支配する科学の力、生活の科学化に驚いているが、しかし民主主義の徹底せる国において国民が、物質と科学とをよくコナすことは当然だ。すなわち国民が自分で政治をなし、自分で文化を建設し、自分の力で生活を開拓しようとするのであるから、その生活力が盛んであり、文化的判断力が非常に向上している結果、物と科学を支配するに至るのであろう。民主化に徹することが何よりも必要だと思う。

民主的に進歩すれば、必然的に社会化するものであつて、文化も向上し、生活も充実し、科学と物質を支配し、自然にビューリタン尊敬の心がわいてくると思う。民主化前進、民主主義の浸透、これが總ての基本である。日本民主化あるのみ、前進あるのみと私は静かに祖国の空をながめた。感想はつきずに出てくるが、出発の時間が迫つてきた。あわただしき中に筆をとつたので十分でないと思うが時間がない。こゝでこの旅行通信を終ることとしよう。(八月十八日午後五時、ホノルルにて)

☆

欧米における政治外交の焦点は、なんと云つても、当分は米ソ間の冷い戦争問題に集中

されている。第三次戦争は起るようなことがあるだろうか、冷い戦争をそのまま終止符を打たせる方法はないものだろうか、これらを察すれば、私の判断は次のようなものだ。

第一次世界戦争はバルカンにおける一青年の投げた爆弾から発火した。第二次世界戦争はヒトラーのポーランド国境突破の無理おしにその端を発した。冷い戦争前進に点火する者は何人であろうか、また、その場所はどこだろうか。

思うに、不幸にして第三次戦争が起るとすれば、それは今までと様相を變えて、共産党と西欧民主主義国との衝突が発火点となるのではなからうか、共産党がどこに侵入し、また西欧民主主義国の何れの国が相手方となるか。そんなことは別として、共産党は恐らく労働組合に喰い込み、大衆動員の形で発火するであろうとの観測である。

私は前にも述べている通り、欧州の大勢は平和を熱望している。戦争の惨劇にコリコリしている。その意味から、戦争にマッチをする共産党の喰い込みを今から止めておこうという希望が強い。共産党が嫌われ出した理由はこゝにあるので、平和愛好者として、差し迫つた立場から、戦争発火者共産党を排撃しているのである。

それのみではなく、西ドイツにおける社会民主主義は、戦争阻止の特別防波堤として多大の期待がかけられている。戦争の根を断つて、世界平和の基礎を作ろうとするには、西ドイツ民主主義を護るべしという空気が強い。西ドイツにおいて、強いのみならず、フランス外交界においても強く主張せられているようだ。我々は平和実現のために、西ドイツ SPD、フランス社会党の健闘を心より希つて止まない理由もそこにある。私は社会民主主義のこれ等の役割の実に大きいことを心より感ずるものである。

欧州における民主的な労働組合が経済闘争に集中し、政治運動をやらないことにも、大きな理由があると思う。共産党の労組侵入を防止し、組合の健全化を図ることが、西欧民主主義として必要なことであつて、これがやがて戦争の阻止、平和の実現に効果があることとなる。

欧州は今や平和を熱望している。社会民主主義の使命実に大なりと言うべきである。私の探していた青い鳥はこの社会民主主義である。

歐米の對日感情は好くなつたか

敗戦の憂目を見て今日までに四年余、今なお占領時下にあつて、海外との自由な交際も出来ない状態に置かれており、真に国際的空白時代ともいうべきこの期間に、世界の對日感情がどんな具合に變つたか、依然反日感情に變りはないのだろうか、また敗戦という大きな痛手を日本に与えたということにより、その気持は多少緩和されたのではなからうか、というようなことを気づかうのは私のみではないであらう。さいわい、今度の旅行の結果、意外にも欧米の人々は、我々の心配していたこととちがひ、日本の過去を問わず、

將來の友好を求める広い寛大な気持で我々に接してくれた。

初めて乗つたノース・ウエスト航空会社の五十人乗大型飛行機の乗心地の好かつたことは、清楚なエア・ガールのいたれりつくせりのサービスと共に、楽しい記憶として残つている。彼女等の態度には我々を蔑視したり、排斥するような態度は微塵もなく、大へんに丁寧なものであつた。

☆

往路ニューヨークのホテルに着いたのは、朝もまだはやい四時で、夜の明けきらぬ頃であつた。そのような時間にM R A関係の、婦人をも交えて数名の米人が、ホテルに出迎えてくれた。旧知のような友情をもつて、なにくれと心配してくれたことは、M R Aという同志的な気持も多分にあつたにはちがいないと思うが、戦前戦中の反日気分などは微塵もなく、出発前に我々の抱いていた杞憂は単なるひが目に過ぎなかつたのである。

ニューヨークからスイスへ愉快的な空の旅を終えて、コーのM R A大会に参列したのであるが、極く少数のドイツやイタリアから参加した代表者を除いては、すべて連合国人ばかり

りて、肩身の狭い思いがしないわけではなかつたが、人種、国境、宗教を超越して道義を昂揚し、世界平和を念願する人々の集まりだけあつて、気持のよい愉快な雰囲気は漂つていた。そして我々も知らず知らず、その中に解け込むような気持になつた。

M R A 大会に出席したビルマの「ラングン新聞」の記者であるモン・モン・ピエ君や、東インドネシア大統領の長男のパーシ・ソエカワテ君の如きは、公開の席上で「私たちは我々の同胞の多くが戦争中、日本軍のため如何に迫害され、酷使され、無惨な死の憂き目を見たのを知つている。又、あまりに多くの婦女子が日本人のために、暴行され殺害された悲嘆な事実を今なおはつきり記憶している。我々は日本人の非人道的野蛮行為を忘れようとしても忘れることができない。日本人といへば、それが誰であろうと敵意を抱かざるを得なかつた。それは我々の今日まで抱いていた偽らざる気持である。しかし、いまここに集まつた日本人に接し、M R A の精神を通じ、心と心が触れ合うに及んで、そうした敵意は次第に薄らいできて、今日では日本人を眞の友として東亜の平和のため、更に国際親善に貢献するために共に手をたすさえて行きたいという気持になつて来た」と大胆に

告白した。聞く方の側に立つ我々にとつては、これは決して肩身の広い話ではない。然し結論において、日本人を見直したということになるので、我々の立場は救われたのである。この告白を通して見ても、日本軍の残した暴虐の跡は、そうたやすく消え去るものではないことを感ぜざるを得なかつた。この償いは新らしい日本の我々が、積極的に友愛の氣持をもつて彼等に接し、東亜の平和、国際親善にもつと力強く働きかけねばならないと思うのである。

☆

僅かな期間ではあつたが、フランスやイギリス両国に滞在中、多くの人々に会つた。また両国に残留する多数の日本人とも懇談する機会に恵まれた。話し合つたすべてのフランス人やイギリス人は、例外なく心から我々を歓待してくれ、かえつて我々の方で戸迷いするような格好であつて、反目的気分などは微塵もなかつた。そこで在留邦人に、外人と交つてのほんとうの彼等の毎日の生活の雰囲氣を聞いて見ると、日本の敗戦という大きな事実が帳消しの役をつとめて、今では我々を敵視するようなものとは極くわずかで、むしろ

我々をかばつてくれるような友愛の情に接するということを知つて、「敗れてのち友あり」の感を深くしたのである。

しかしながら、パリ訪問のとき、多年フランスに生活する一人の日本人の話聞いたのであるが、佛印に関係の深い一部フランス人は、我々に対し友好的ではないとのことであつた。フランスにとつて、佛領印度支那は東洋における唯一にして貴重な植民地であり、その特産である米その他の原料品は同国にとり、大へん重要なものであることは今さらいうまでもない。フランスにとつて重大関心事である佛印に対し、日華事變このかた、日本軍部は強引に横車を押し、当時フランスの国内のごた／＼のすきに乘じて、軍事占領を敢えてし、暴虐の限りをつくした日本軍のこのような行動に対し、一部フランス人が苦い記憶を持つのは無理のないことである。そして彼等は、戦後日本が復興したあかつきには如何なる野心をもつて佛印にのぞむか、判断に苦しむという心配を持つているように傳えている。このことは、彼等のうけた衝撃があまりに大きく内在するためであると共に、戦争を放棄した新らしい日本の動向と目標について、極めて無関心であるに因るものであつ

て、フランスのみではなく、広く海外に眞の姿の日本を知らしめるべき努力が必要である
と思うのである。

☆

ロンドンに滞在している間、一老婦人と話しあつた。その婦人は戦前宣教師の夫と一し
よに中華南洋方面へ布教していたが、日本が南進する前、夫人だけ先きに本国に避難し、
夫は機会を失つて、シンガポールに残らねばならなかつた。ところが、日本軍がそこを占
領したので、その宣教師は抑留せられて、二年のあいだ老齡と熱帯の酷暑とによつてつい
に病魔に襲われて、終戦を待たず、異郷に斃れたとのことである。夫人が非常に落胆した
ことは想像に難くない。宗教的に諦めの強い夫人も、最初の中はどうしても諦め切れず、
日本軍、日本人の非人道的な行爲を責めざるを得なかつたそうである。

夫人と同じような、あるいはもつと悲惨な境遇に置かれた人は決して少くなかつたであ
らう。こういう人やその親兄弟、友人が我々に好感を持つということは、期待する方が無
理である。殊に上海に、香港に、シンガポールに、世紀にわたる政治や経済の權益を、

一時にしても奪われたことを思い合せて、一部イギリス人がその国民的性格からいつて、根強い反日感を持つことは想像に難くないのである。現にグラスゴー市を訪問したとき、全市の市長招待の公式晩餐会に出席したのであるが、同市長は保守党出身だけあつて、なか／＼格式張り、その挨拶の中に戦後最初の日本人賓客を公式に招待することは光栄であると言頭したのはいゝが、最後に日本が過去の非を繰り返すような場合は、英国は直ちに立つて徹底的に膺懲するものであると結び、内在している反日感情を露骨に表明したものである。

敗戦によつて、反日感情は帳消しになつたといふことは前述べた。表面的に言つて、確かにそう感じ得るのであるが、我々は安易な氣持でそれを期待してはならない。過去の罪業の償いは、日本人として、その責任を分担し、我々は身をもつて新しい平和な人道的日本の建設に努力することこそ世界の信用を得る道なることを、強く肝に銘すべきであらう。

ドイツは英佛とちがつて、戦時中わが同盟国であり、敗戦の憂目を見た同じ境遇にあるということから、特殊な親しみをもつて我々に接するものが多いように思われた。我々の西ドイツ入りをいろ／＼と取りもつてくれたクッパーヒュッテ製銅会社社長のクス氏夫妻とは、スイスのコーで初めて知り合つた初対面の人であつたが、しかしその斡旋振りは通り一辺のものでなく、実に懇切丁寧で、感謝に堪えないものがあつた。またドイツ社会民主党党首シュマッハー氏が、我々一行多数のもののため四台の自動車を提供し、午餐会を設け、また帰途は一等の汽車切符まで用意して、我々を歓待してくれたことは、単に主義主張を同じくする同志愛的親しみのみによるとは言えないものがあつて、うれしく感ぜられた。

日独両国が廢墟の中から祖国を再建するためには、両国が互いに手をたすさえて進み、出来るだけ早く戦前の通商關係を復活させたいものだとの希望を述べるものも少くなかつた。前にも述べた通り、ウェストファリア州首相アーノルド博士を初め、ルール地方の三主要都市の市長が歓迎の席上で我々に対し、日独両国は産業の發達と通商の再開や文

化の交流によつて兩國の親交を深め、世界平和のため寄与したいと異口同音に述べた。それは単なる外交辭令のみでないことが肯かれたのである。

☆

歐洲大陸を去つて、ニューヨークに着き、多忙な数日をそこで過ごした。その間、我々は在留同胞や米国人の案内で、各方面を見物し、視察することが出来た。たま／＼暑気がひどく、閉口したけれども、不愉快を感じるような機会にぶつかつたことは、たゞの一回もなかつた。

ついでワシントンを訪問し、非公式ではあつたが、下院議長レーベン氏に挨拶をして、アチソン國務長官と懇談し、その他、上下兩院の有力議員と会談した。誰も過去の苦い事実を忘れたかのような、いんぎんな態度で快く應待してくれた。下院訪問の際、下院議員コックス氏は本會議で「日本の新憲法が定められてからの最初の總理大臣であつた片山哲氏とその一行がワシントンを訪問中であることを議員諸賢にお知らせしたい。同氏一行に対し、その米國滞在中、出来るだけの便宜と援助を供与するのは、我々の義務であり、

喜びとするところである。今や極東の情勢は緊迫している。日米両国はその親善関係を益益緊密にし、東亜の平和維持のため、提携することが必要である。」との意味の演説をし、技術的には現在日本はまだ敵国であるというような観念はなく、我々の訪米を歓迎してくれたことは意外と思う程であつた。更に同氏の演説がコングレッションナル・レコード（議会議事録）に掲載され公表せられたことは、米人の持つ対日好感の一端を窺うに足るといえよう。

米国中部地方は、シカゴおよびデンヴァー両市を訪問したのであるが、シカゴには二万、デンヴァーには一万の日系人が安住していた。戦前、両市とも日系人口は大へん少数であつたが、戦争が初まると共に西部地方の日系人が大量に轉住し、戦後も引き続き残留しているのである。これまで、中部地方は西部に比して排日気分がなく、就職口も豊富であるということがその原因らしく、日系人中には一人の失職者もなく、愉快に生活しているということである。

日系人の大部分の集合地は、なんといつても太平洋沿岸のシアトル、サンフランシス

コ、ロサンゼルス等の都市で、戦争中コンセントレーション・キャンプに強制收容せられたものも大部分復帰し、もとの職業についておるけれど、強制收容直前に彼等は過去数年かゝつて築上げた營業、生活の本拠を二束三文で處分したので、復帰してその再起には相当の努力と苦心を要し、終戦後すでに四年余になるも再起することの出来ない気の毒な人もすこしはあるとのことであつた。しかしながら、戦前とちがつて排斥気分は霧散し、むしろ庇護援助してくれるという逆の状態なので、困難の中にも明るい生活をする事が出来るようになった。

☆

ハワイのホノルルは、その人口三十五万の過半は日系人である。殊に現在はいわゆる一世の時代より二世の時代に移り、三世もぼつ／＼ある成年に達する時代になつてゐる。したがつて、日系人の多数は日本語より英語が得意で、日本人というよりはハワイ人と言つた方が適當と思われるほど、ハワイの地に足がついてゐる。このような特殊の事情にあるので、戦争中は大部分の日系人はキャンプに強制收容せられることもなく、引き続き營業

をつゞけることが出来たので、米本土の日系人よりは、遙かに恵まれている。これらの諸君はあらゆる職業に従事し、更に政治的にも進出して、現在では下院に十名（全議員三十名）の二世日系人議員を出し、上院には三名（全議員十五名）を送り、その一名は上院議長に選出せられている。目下、ハワイにはいわゆる立州運動といつて、ハワイを政府直轄のテリトリーである現在の地位より、米国の一州たらしめようとする運動が起つていますが、この運動は日系人も重要な役割を演じている。このような事情にあるため、ハワイ在住の日系人は、なんら排斥せられることもなく、常夏のハワイ生活の幸福を満喫している。

以上述べたように、戦後在米日系人は、一世二世を問わず、嫌悪すべき排日気分から解放せられて、平等の待遇と生活を享受するようになったが、その理由がどこにあつたかを探求して見ると、次の章に述べる二点に要約することが出来る。

日系人とアメリカ

もし日米両国間に問題でも起きることがあつたら、日本移民は必ず本国に帰還するか、または非米的行爲に出る民族であるというのが一般米人の対日観であつた。しかしながら、大戦中、日系人の殆んど全部が米国の法規を守つて、法治国民たる眞価を發揮し、ちよつとも非米的行爲がなかつたのみならず、二世は進んで出征し、東に西に勇戦奮闘して、偉勳を立てた。就中、二世のみで編成された有名な第四四二部隊のシシリー島およびローマ攻略の功績は米国全軍の手本として激賞された。米国のために忠誠をつくし、多く

の尊い犠牲者を出したのである。この生きた事實は、米人をして日系人を真底から見直すこととなつたのである。

米国が広島、長崎に投下した原子爆弾の効果はてきめんで、戦争の終結を促進したけれども、その結果から見て、あまりに残酷であつたという気持が米国人のビュートリタンの教心から湧きでて、日系人に対し、また日本人一般に対し、寛大な態度を採るようになったのであると推測し得る意見が多い。

以上のような理由で、戦後米国人の対日態度は甚しく好轉して、日系人の社会的地位はいよ／＼向上することとなり、他方、法的にも有利な考慮が拂われることになつた。すなわち、昨年議會を通過した法案に追放者在留許可法案および戦時損害補償法案がある。前者は戦時中、非米的であつたと認められ、または在留する資格のないものとして追放を命ぜられた日本人で船便がないために追放を延期せられたものに対し、その命令を取り消し、引き続き在留することができるとしたものである。後者は戦争勃発と共に、コンセントレーション・キャンプに強制收容せられることになつた日系人が、当時の環境上、

その財産を不当に安価で処分させられ、損害を蒙つたものに対し、政府は五億ドルの基金を豫算に計上して、日系人の損害を賠償しようとするものである。

従来、日系一世は市民権がないため、土地所有権もまた漁業権ももてなかつた。そこで、彼等は便法として、彼等の子供、すなわち市民権をもつてゐる二世の名義をもつて土地を所有し、漁業権を得ておつたのであるが、排日熱が旺盛な頃は、こんな便法がしばしば表面の問題となり、裁判沙汰にまでなつて、結局違法であると、判定となり、日系人の生活は脅かされ、その経済的發展も多分に制限されたものである。戦後、右のような判定を受けた日系人が、これに服し得ないといつて、大審院に再審を上告した結果、大審院では第一審の判決を覆して、違法にあらずとの判決を下した事件がある。すなわち土地所有権問題に關し「大山事件」といわれているもの、漁業権問題に「高橋事件」といわれているものがそれである。右の判決の結果、現在市民権のない一世の生活および経済的活動は正当な保護をうけ、安定することになつたのである。右のようなことは、戦後における対日好感の顕著な現われであると言ひ得る。

戦後、中国人、フィリッピン人、印度人のように、これまで非白人として移民法上差別待遇を蒙つておつたものに対し、白人と同等の待遇を与える改正法案が成立したのと、米人の対日好感の機会を捉えて、全米日系人は「日系米国市民同盟」(Japanese-American Citizens League)を組織し、右同盟内に「差別待遇反対委員会」——略称して反・差委員会と言ふ——(Anti-Discrimination Committee)を組織、移民法の改正要求運動を起すこととなつた。

右委員会の運動と相呼應して、親日米人間にも移民法の不合理を指摘し、これを改正する必要を強調するものが現われるに至つた。これが具体的に法案として現われたものが、一九四八年一月下院に提出せられたいわゆるジュード案である。同案はミネソタ州選出民主黨議員、ウォルター・H・ジュード氏によつて提出せられたものである。

同法案の正文は「法的永住権を有するすべての移民に対し、米国の帰化市民となる特権を与え、アジア及び太平洋洋住民に適用すべき移民割当数を定め、且つその他の目的のための法案」であつて、その主な目的が日本人を対象としたものであることは言を俟たない。

提案者ジュード議員の説明によれば、

「一九四〇年の人口調査の結果、人種的理由に依り帰化し得ざるも、一九二四年以前に入国し、永住権を有するものは約九万人である。その中八万五千名は日系人で、三千乃至四千名は朝鮮系であり、百四十五名はポリネシア人である。本案はこれ等移民に対し、他の国よりの移民と同様、語学、健康、品行、資産、その他の資格審査を行い、これに合格せるものは帰化申請をなし得ることとするものである。一九四〇年以後、人口調査行われざるをもつて的確の数字はあげられざるも、前記の数より少きことあるも多きことはない。何故かなれば、その後死亡者もあり、日本に帰還せるものは四千乃至五千名に達するからである。

本案は正義の問題以外何ものでもない。これ等の人々は平均年齢五十歳以上で、現に米国に合法的に居住し、余生も米国に送らんとするものである。彼等は税金を納め、善良なる法治国民であることは、戦時中よく立證せられた。殊に彼等の子供が米国軍隊に入隊し、勇戦奮闘、輝かしき武勳をたてた事實は、日系人が米国に忠誠であり、米国市

民として十分価値あるものであることを明示するものである。

過日一米国商船の改名式が行われた。その名は、有名な第四四二部隊の決死隊に属し、イタリア戦線において、奮戦力闘、遂に米軍のために戦死せる日系米人の名をとつたものである。この米国商船が、愛国的、善良なる米国民としての彼に捧ぐる我々の尊敬の表彰、即ち彼の名を七つの海に運ぶに拘らず、彼の母と父とは、現在法律下において、米国民にはなり得ないのである。私は我々の良心において、又我々に対する他国の尊敬において、以上の如きは正に正義にもとるもので、修正せらるべきであることを確信するものである。」

と説明し、現存排日移民法の改正の必要を強調したのである。本案は政府、議会、民間団体、著名人の強力な支持を得て、昨年、下院の司法委員会の小委員会を全会一致通過したのであるが、左に支持者の賛成意見を略記して、一般米国人の対日態度の一端をうかがうこととする。

國務省、極東局長、ワルトン・パターウオース氏。

「本案は帰化問題に関する限り、人種的差別を根本的に撤廃するものであつて、何人とも特定の人種なる故をもつて帰化権を拒否せらるゝことなく、また割当数の範囲内において移民として入国する権限を失うものでない。國務省は衷心本案を支持するものにして、東亜諸国との関係重要な現在の事態に鑑み、議会において速かに本案を審議協賛せられんことを希望するものである。」

カリフォルニア州選出民主党下院議員ジョージ・P・ミラー氏。

「移民法において規定せらるゝ人種的差別待遇は、もはや撤廃せらるべき最後の段階に到達してゐる。現在差別待遇をうけつゝあるは、僅かに若干の東洋人と太平洋土人のみであつて、彼等が一定割当数内において米國に入国し、市民権を獲得し得ずという正当なる理由は認め得ない。現在移民として入国し、市民権を得る資格なしといわゆるもの大部分は日本人である。私は長き経験により、日本人及びその家庭をよく知つてゐる。彼等は法治國民であり、教育に熱心であり、社会事業にも貢献してゐる。第二次世界大戦中、二世は東西両洋において米國軍隊に奉仕した。欧州においては二世部隊として

有名なる第四四二部隊は、他の如何なる部隊よりも多くの勳章を受け、また多くの負傷者、戦死者を出している。彼等はイタリア戦線においては終始勇敢に戦い、フランスの東北戦線においては、退路を断たれたるテキサス大隊を、非常なる犠牲を拂いその救出に成功した。かくの如きは、他の如何なる部隊もなし得なかつたところである。また太平洋戦線においては、彼等と酷似せる敵と戦うが故に、味方よりは敵と誤認せらるゝ危険あり、また敵に捕わるゝ場合は、普通の米兵よりも虐待せらるゝ危険があつた。しかしながら、彼等はこれ等の危険を意に介せず、情報部隊の第一線に活躍せる功績は偉大なるものがあつた。また彼等の両親は、法律上米国に帰化し得ざるが故に、技術的には日本人であるに拘らず、戦時中あらゆる面において米国に奉仕した。彼等の忠誠は米国と共にあり、形式上の母国である日本の敗戦のため、至大なる援助を米国に奉仕した。彼等の多くは、殆んど半世紀を米国に過したものであるが故に、米国市民たるを許さるべき資格者である。

カリフォルニアにおける我々は、アジア諸民族と太平洋沿岸諸州米人との親善友好の

緊切なるべき新太平洋時代にのぞみ、現存差別待遇を撤廃して、彼等の、そして世界の親交を得ることを希望するものである。」

元駐日米國大使ジョセフ・C・グルー氏。

「極東の民族、殊に日本人は同化し得ない民族で、もし、日米間に戦争でも起れば日本人移民は決して米國に忠誠ではなく、且つ彼等の生活の程度は他移民より低きが故に、經濟的問題を惹起する惧があるとの理由で、現存移民法は日本人に対し差別的規定を設けているが、この同化の問題は今次大戦により有効に解決せられた。即ち米國在住の日本人は戦争中米國に協力し、法律を遵守し、怠業または間牒の行為なく、語学教師として、また翻譯に製圖製作に従事して、米國の利益のため奉仕した。他方二世は進んで入隊し、欧州および太平洋兩戦線に活躍奮闘して、優秀なる米國兵たることを立證した。かの四四二部隊の殊勳は、參謀總長マーシャル大将の報告によりあまねく知らるゝところである。

次に日本移民の生活程度の問題であるが、これは時が解決した。最初の日本移民は、

昔の白人移民に比し、その生活の程度は、たしかに低かつた。しかしこのことは他の多くの移民の場合にも言えることである。米国において生れた二世は、他の移民の場合と同じように、一世の地位を向上するに役立つた。今日日系人は米国の各地に住居し、他の米国人と同様の生活を営んでいる。以上のような事態において、現存法規の存在の理由は全く解消したのであつて、中国、印度、フィリッピン各国人に対し、差別待遇を撤廃した今日、これを日本人に対し存続することは不合理と言わねばならない。

本案の重要性は民族の天賦的平等主義を確認し、米国民主義精神の徹底を促進する力となるにある。現在東洋民族間には新らしき大きな動きがある。日本における民主主義運動は殊に顕著で、移民法の改正により米国の信念を日本人に徹底せしむることは、この際特に肝要である。

一九二四年移民法の制定は、米国との親交政策を主張せる日本の自由主義政治家の立場を窮地に陥れてしまつた。彼等は投獄や暗殺の危険を冒して、米英との友交關係促進に つとめ、軍部擡頭を牽制して来た。しかし移民法は軍部及び極端派に口実を与え、日

米關係を危機に導くこととなつた。このことに関し、一九二四年二月、日本議會においてなされた阪谷男爵の演説を想起するのである。その趣旨は次の如きものであつた。

「もしこの移民法案が通過するが如き場合は、重大な結果を招来することとなる。私は本問題が日米紛争の原因となるとは思わないが、日本人が米英により劣等人種として分類せられるならば、九カ国条約調印国との協力、及び中国問題に関する条約の条項、及び精神尊重に対する日本国民の希望を甚しく破壊することとならう。本法案が法律となる場合、何人もそのもたらすべき結果につき、豫見し得ないであらう。」

阪谷男爵の言の如く、事態は險惡となつた。

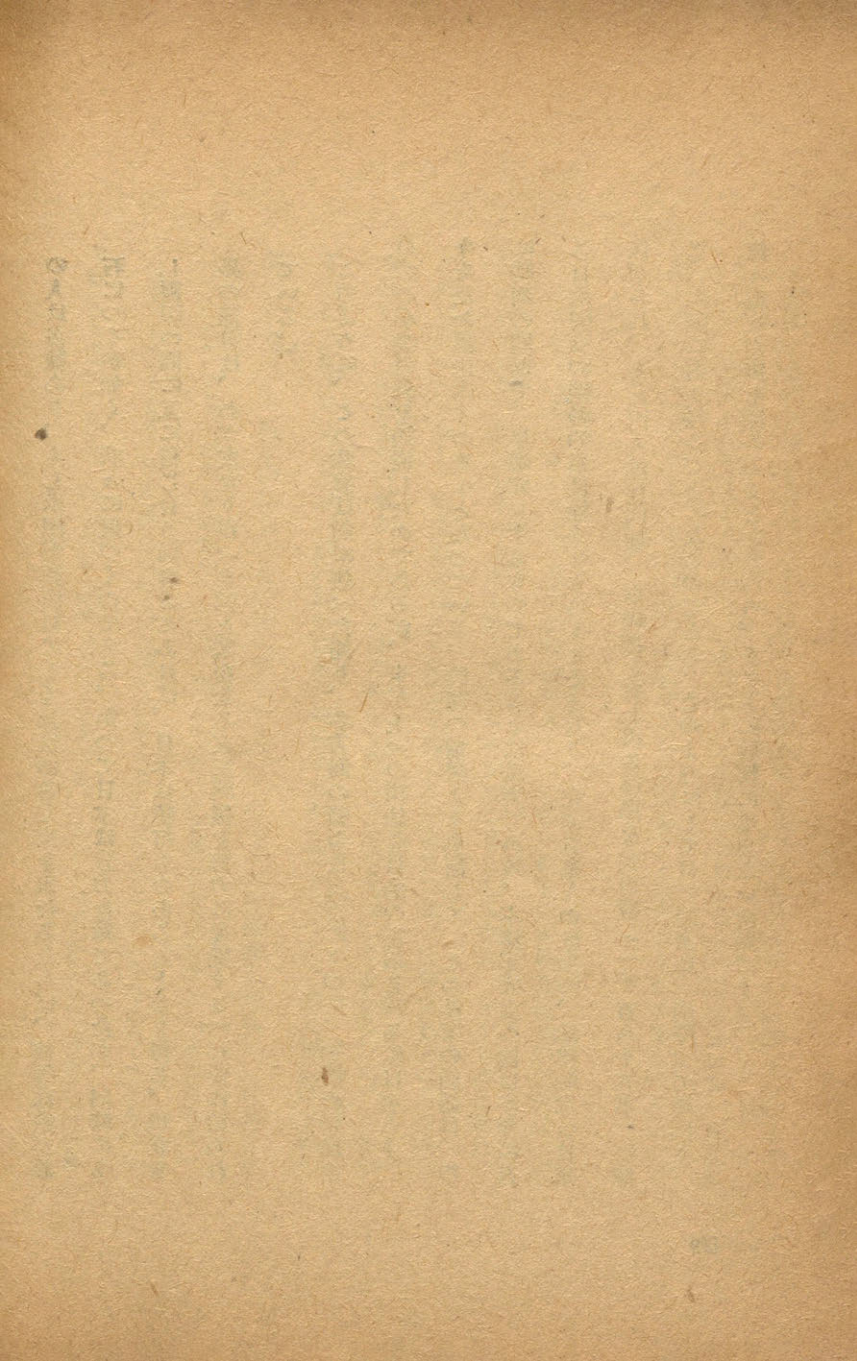
一九二八年幣原外務大臣退陣し、田中大將首相となるや、九カ国条約は棚上げとなり、軍部が政權を擅にするにいたつた。一九三二年、私が東京に着任してからは、日本における平和の希望は崩壊の一途を辿ることとなつた。当時私は國務長官スチムソン氏に書翰を送つたが、その文句を今尙記憶している。すなわち「日本の情勢は一九一四年直前のドイツの情勢と酷似し、正に戦争気分が充溢している。日本軍は戦争を目的とし

て拡張せられ用意せられ、そして戦争を歓迎している。彼等は未だ敗れたることなきをもつて、無限の自信を持つている。私は決して取越苦勞をするものではないが、東亜に起り得べき事態に対し、米国は十分注視するの必要ありと信ずるものである」と述べて置いた。

私の駐日末期においては、日本穩健派にとつての唯一にして可能な復活の機會は、軍部の大失策か、又は日本の敗戦以外にないことがはつきりして来た。今や日本は敗れ、軍部は完全に崩壊し、穩健派が再生の機會を得ることとなつた。彼等は米国の占領政策を歓迎し、米国も亦穩健なる日本更生に援助を與うる機會を持つこととなつた。日本が軍部の支配下にある間は、移民法の改正の如き到底不可能であつた。然し現在は主義の問題として、これを完遂し得る時期に来てゐる。十年も日本に滞在した私は、日本人をよく知つてゐる。戦争を好まず、外国、殊に米国と親善關係を希望する「よき日本人」(good Japanese)ほど優良なる人を他に求むることは出来なく。かういうよき人は戦争前にも多かつたが、皆軍部に圧倒されてしまつた。しかし今日においてもなおこの種

○人は多数あり、もし米国が真面目にして誠意ある友交を求むるならば、彼等は鉄が磁石につくが如く、我々に近づくのである。かつて日本は強力な敵であつたが、同時にもし兩國の間に互に信じ合う精神さえあれば、日本は値打ちのある友となり得る。現在世界的情勢は、わが友たり得べき国と緊密なる友交關係を強力に促進するの必要に迫られてゐる。」

このように、この法案は前に述べた通り、各方面の強力な支持によつて、下院の司法委員会の小委員会を通過したのであるが、未だ上院の司法委員会の審議を得るには至らず、今もなお議決未了のままとなつてゐる。四冊の情勢より判断して、この法案の通過は、単に時期の問題で、早晚成立するものであることは確實である。本法案成立の曉は多年に亘る日米国交の精神的痛は除去せらるゝこととなり、在米日系人の社会的、法律的地位は確保せられ、また白人移民同様、市民権を有し得る移民を割当数（二年百八十五名）に應じ、米国に送り得ることになるのである。このようにして日米国交は、雨降つて地固り、愈々親交の度を深めることとならう。まことに欣快に堪えない次第である。



「産業社會化」政策のその後

——英国労働党の見通し——

國有化の輝かしき業績

こんどの外遊に際して、私はいろいろ欲張つたプランをもつていたが、イギリスに行つて労働党の閣僚に会い、社会主義的政策、殊に重要産業國営化實現の感想をきいてみたいといふことも、その一つであつた。ところが、当時の通信にも書いたように、日程があまりに忙しく、ゆつくりその衝の人に会つて、それをきく時間がなかつたのは残念であつた。さきに豫算漏洩問題でみずから大蔵大臣をやめたヒュー・ドールトン氏には会つたが、既に管轄違ひの無任所相であり、時間もなく、コミスコ加入のことや、ひと通りの挨拶

擲をしただけで、突つ込んだ話にはならなかつた。

私が、特にききたいと思つていたことは、言わば資本主義經濟の枠の中で、漸進的にもせよ社会主義的政策を行う場合、イギリスあたりでは經濟的にどういふ影響が生じ、それを労働党内閣が現実はどういふふうに処理してきたかということであつた。例えば、石炭とか鉄鋼とかいうような大きな産業を国营化する場合、民主主義の議會政治の下では、法案が出来てそれが国会を通過し、実施の段取りになるまでには相当の日数がかかる。その間に、いろ／＼の經濟的停滯や混乱が起るものである。わが国で、あの程度の石炭國家管理を実現する場合にも、私はそれを感じた。イギリスの労働党内閣の場合は、イングラント銀行国有から始まつて、石炭、ガス、電気、運輸等々、次々に国有化が行われたのであるから、その影響も大きく、労働党の苦心は並大抵ではなかつたろうと想像される。国会における絶対過半数という条件があつたとしても、四カ年間にあれだけの国有化を実現し、しかも生産は減退するどころか着々と増加し、輸出も増進しているのだから大したものである。私は、その輝かしい業績を羨しく思うと同時に、その裏にひそんでいる労働党内閣

の爲政者としての苦心をきゝたく思つたのである。

明年に豫定されている総選挙をひかえて、昨年あたりから労働党の内外で論議的になつていたことは、国有化政策を過去五カ年間に同じ速度でどん／＼推し進めることを、総選挙の政綱の中で公約するかどうかということであつた。昨年五月の党大会——第四十七回年次大会——で、ハーバート・モリソン氏はこう言つている。

「私有制を公有制に移す——立法化するということは、仕事の始まりに過ぎない。それだけでは仕事は終らないのだ。それを実際に適用し、地についたものにし、もし公共の利益の立場からみて、また実際の運用の経験からみて、必要ならば、社会化産業の組織を改め、變更するという沢山の仕事が残つている。だから、次の総選挙綱領の中に、更に公有化を前進せしめるについての提案を適当に織込むことは正しいし、私自身諸君に對して、執行委員会がそうするであろうことを約束するが、同時に、現議会で社会化された産業を底固めし、発展させ、更にもつともつと能率的なものにするについての十分な時間を、内閣の閣僚に与えることの必要を閑却してはならない。」

モリソン氏は、ベヴィン外相と肩を並べる労働党の最高幹部の一人で、永年ロンドンの労働党を率いて今日の強大な勢力をきづき上げて来た人だ。戦時中は内相、保安相などを歴任し、現在は枢相として内閣の下院代表をつとめている。毎年、高点で執行委員に当選し、政務と党務を通じての最高の代表者の一人であり、また実力者でもある。この人が、党大会の席上で、公式に重要産業国営化政策の「地固め」(Consolidation)の問題を提起したことは頗る注目をひいた。つまり、一九五〇年に豫定されている次の総選挙で、労働党は次の五カ年(一九五〇—五五年)の間に、産業社会化政策をさらに一層推し進めることを約束するか、過去五カ年間に実現した社会化を「地固め」する余裕をもつか、という問題である。重要産業国営ないし社会化は、社会主義政党的基本政策であるだけに、またイギリスの場合ではこれが前回の総選挙の中心題目であり、その後の五カ年間労働党内閣が最も力こぶを入れてきた政策であるだけに、それを明年の総選挙でどう取扱うか、また引きつゞいて政権を担当した場合、これをどう進めてゆくかは、けだし大きな問題たるを失わない。

私は、過渡期の實際政治の経験をもつ一人として、モリソン氏の言う意味が十二分にわかる。それは実に、責任感にみちた改革者の言葉である。何のケレンも人気取りもない。資本主義私有経済の家の中に、社会主義的な公有経済の柱を導入して、家屋を壊さず、家人が住居して仕事をしているまゝで、これまでの腐敗しかけた柱と取りかえようとするのであるから、その苦心は並大抵のものではないわけである。

もつと社會化するかどうか

モリソン氏の提起した問題に関連して、フェビアン協会は昨年末「もつと社會化するか、まうか」(More Socialization or Less?)とシラバンフレットを、一九五〇年選舉叢書の第一冊として出している。同協会調査部長チャップマン氏らの執筆によるものだ。私はこんどの外遊に際してこれ入手し、興味深く一読した。その中で、一九四五年度の総選挙と一九五〇年の場合を比較している部分は、特に興味がある。次に、その部分を要約して紹介してみよう。

一九四五年、総選挙当時は、(イ) 国有化政策の対象として採り上げられた産業には、既にある程度の統制ないし管理が行われ、自由企業にもどる可能性がなく、むしろ国有化の一步手前にあるとみられていたものが多かつた。例えば、イングランド銀行にしても、大蔵省と密接不離な特殊法人となつていたし、石炭の鉱区権は既に国有化され、石炭産業そのものも戦時中は一種の国家管理の下におかれていた。次に、(ロ) それらの産業を国有化することの必要は殆んど世論となつていた。私企業としての石炭産業の非効率なこと、労資関係が常に悪いこと、中小炭坑が濫立して無益な競争が多かつたことなどのために、かりに一九四五年保守党が政権を握つたとしても炭鉱国有だけは実行せざるを得ない状態だつたのである。またガス、電気産業の場合には、私営と公営が地域的に入り乱れていて、それを統一することの必要が痛感されていたし、内国運輸、航空、鉄鋼の場合は、これらを基礎産業にふさわしい計画的な運営の下に置くためには、私有にせよ国有にせよ、とにかく公共的管理の下におく必要があつたが、私的独占の弊を知る国民は国有化を採んだのである。だから、一九四五年の重要産業国有化プログラムには、さほど「革命

的」な要素はなかつたと言える。そこへもつてきて、(ハ) 当時は終戦直後のことであり、戦後独得の社会改革を要望する気運があつたことを見逃すことは出来ない。

ところで、一九五〇年の場合はどうか。まず労働党は、(イ) 公有制を防衛する立場にたつ。既に出来上つたイングランド銀行国有、炭鉱国有等についてその実績、能率如何、国民生活に及ぼした影響如何が試験されるわけである。あと数年を以てしなければこれら国有化政策の功罪は本当に明らかとはならないし、殊に戦後のインフレーションと経済的打撃に直面して、労働党内閣が應急対策に忙殺されたことを考慮に入れなければならないが、しかしこのハンディキャップは当然甘受しなければならない。次に、(ロ) 明年の問題の焦点はおそらく鉄鋼国有の是非になるであろうが、前回の石炭国有の場合ほど、問題の实体が国民にとつて明らかでないうらみがある。その他、明年の国有化プログラムに含まれると豫想される諸産業についても、国有化の是非を判断する十分な資料を国民はまだ与えられていないのである。更に、(ハ) 過去五カ年の産業社会化政策の実施は、一種の「混合経済」(Mixed economy)とそうべき一部社会主義的ではあるが、なお一部資本

主義である状態を生み出した。この状態が、産業の資本家、経営者、労働者の三者の間に互に反撥する意欲を発生させていることは否定出来ない。平和的に社会主義に移行しようとする場合、これは当然起つてくる問題だが、労働党は次の五カ年間に於いて、この最も困難な実際問題を処理しなければならず、しかも五カ年間に於いて社会主義化を完了することは、到底これを望み得ないところに、一九四五年の場合とは全く異つた苦しさがある。そこへもつて来て、(二) 一九五二年マーンシャル計画による対英援助が終るまでの至上命令として、現在の生活水準を維持するに足る生産増加を実現しなければならないという課題がある。従つて、一九五〇—五五年の経済政策は、何よりもまず、当面の生産を増加するものでなければならず、この角度から国有化政策がきびしく批判されることを覚悟しなければならないのである。

大要右のように、一九四五年と一九五〇年の場合を比較したのち、この小冊子は国有化ないし社会化プログラムの「地固め」か「拡張」(Extension)かの問題を検討してゐる。こゝにその所論の詳細を敘べることは避けて、結論だけを紹介しておこう。

「労働党がその初めての五カ年間の政権から学びとるべき主なる教訓は、既に公有制（社会化政策）の第一歩が踏み出されたからには、簡単に「ひと息入れる」余地はあり得ないということだ。強力な「地固め」政策が同様に確固たる社会化拡充政策と結びついていないプログラムは何人をも喜ばせることが出来ず、殆んど何等の業績を収めないであろう。保守党の新聞は逡巡を喜ぶに違いない。そのようなプログラムは政治的「ミニメンヘン」となるう。

各方面からの異つた公有制への要望は、一つの政策綱領の中に融合出来る筈であるし、生産拡充の必要と、絶えず発展する民主的な産業組織の建設もその中に示すことが出来る。同様に、社会主義者たるものは、新しい経済的民主主義の混合組織を、一九四五―五〇年の経験によつて国民が建設することを教えられた強固な基礎の上におくことが出来るよう、「地固め」することの価値を認識すべきである。

最後に、目前の事件や課題の錯綜する中にあつても、我々は一つの偉大な国民の前途と目標を變えようとするこのぼう大な実験のもつ窮極の道義的な、精神的な基盤を忘れ

ないようにしようではないか。もし我々が新らしい社会を建設しつゝ古い社会の崩壊を避けようとする社会主義的方法に確信をもつならば、常に「行いつゝ学ぶ」ことを忘れず、しかし着実な變革のリズムを絶対に失わぬようにしつゝ、一步々を踏みしめてそれを実行して行こうではないか。」

重要産業社會化の成績

いままでに国有化された産業の成績はどうだろうか。これも、こんどの外遊に際して、私がイギリスの当事者から直接ききたいと思つていた点だつた。私は労働黨員でない人会つたとき、つとめて労働党内閣の評判をきくようにしたが、概ね悪い感じを持つてはならず、次の総選挙には、やはり労働党が勝つだろうと言つていたところから考えると、産業社會化政策の実績も順調に進んでいるように思われる。

国有化された産業のうちで、主要なものは、何と言つても石炭鑛業である。イギリスにおける石炭業の重要さは、わが国の比ではない。出炭量からみても、一九一九年には

三億トンを超え、輸出の大宗であつた。電気も殆んど火力発電だし、家庭用としても普及している。この石炭業がいろいろの原因のために近年衰微の一途を辿つた。一九一九年と第二次大戦直前の一九三九年を比較すると、出炭量は三億一千四百万トンから二億三千万トンに落ち、労務者の数は百七十七万人から七十六万人に減り、輸出は四千七百万トンを激減した。労務者の失業率は、第二次大戦前の十二年間、平均して四人に一人を下らなかつた。労働条件も悪く、他の八十産業に較べて、賃金その他の水準は劣つていた。業務上の災害や疾病も多く、一九三八年には九百六十人に一人の割合で死者を出し、四百人に一人の割合で罹病者を出していた。機械化が進んで、割合に能率が悪く、一九三八年の労務者一人一交替当り出炭高は一九一三年に較べて、僅か十三パーセントふえただけであつた。同じ期間、ルール炭鉱業の一人当り出炭高が六十四パーセント、国営下にあるオランダの炭鉱が百一パーセントふえているのに較べると、格段の相違である。殊に、炭坑主の労働問題に対する理解の不足、設備改善に対する熱意の不足、中小業者の濫立などは、イギリス石炭業の致命的な欠陥であるといわれ、国有化以外にその沈滞を打開する方途なし

とみられていたものであつた。

「石炭産業国有化法」が成立したのは一九四六年七月で、実際の国有化は四七年一月一日から発足した。その後二カ年間の成績を数字についてみると、まず、出炭高では一九四七年が一億九千七百六十六万トン、四八年が二億八千四百四十二万トンで、四五年の一億八千二百七十七万トン、四六年の一億九千六万トンにくらべ漸増している。過去十カ年間の統計をみると、一九三七年から四五年までの出炭高は、戦時中も例外なしに、ズツと減少の一途をたどつていた。それが国有化以来増加に轉じたのである。次に、特筆すべきは、労務者をたどつていた炭坑が、国有化後は一九四七年が七十一万一千四百人、四八年は七十二万六千人というふうに増加していることである（四六年は六十九万六千七百七人であつた）。これは、国有化後一週五日労働制を採用したほか、労働条件を改善した結果であるともみられている。しかも、能率を示す労務者一人一交代当り出炭高（坑内坑外を合せて）は、四五年が一・〇三トン、四六年が一・〇七トン、四八年が一・一一トンと着実に増加しており、国营即非能率の批評を裏切つてゐる。労務者の欠勤率も、一九三八年

以来増加する一方だつたのが、国有化以後減少に轉じ、四五年の一六・三一%、四六年の一五・九五%に対し、四七年は一二・四三%、四八年は一一・六四%と良好な成績を示している。これは多分に、鉱山労働者組合の協力によるところが大きい。

たゞ、国有化後の難点は、コストが高くなつたことである。一九四七年度のトン当り出炭原価は前年にくらべて、約四シル三ペンスを増加しており、また国有化後、一年六カ月を経た一九四八年六月の炭価は、前年一月に較べて六シル六ペンス高くなつてゐる。労働覚悟の説明によると、この六シル半のうち六シル以上は、労働者の賃金や休日手当の増加、いろいろの福利厚生施設の改善の結果であつて、社会主義の観点からはむしろ誇るに足るものであるとのことだが、望むらくはこれを炭価の値上なくして実現出来ないだらうかということである。炭価が上れば、総ての産業が打撃を受け、輸出競争力が減退し、イギリスの場合では各家庭の台所にも直接ひびいてくる。労働者の待遇を良くすることは必要であり、炭価値上の大部分がそれに原因するといふことは利潤経営の場合とちがつた社会化経営の長所だが、そこを何とかも一つ工夫して、単位当りコストを引下げつゝ賃金

や労働条件を良くしてもらいたいと思う。なか／＼難しいことだが、産業社会化の進展のために、これはぜひ実現してほしい。ちなみに、国有化産業は独立採算制で運営されており、石炭業は国有化第一年には少からぬ欠損を出したが、第二年の昨年度は、僅かながら利益金を計上した。第一年の欠損は、石炭増産のために採算のとれない炭坑をも運営したためとみられる。

こうして、炭鉱国有は増産の役目を果し、労働状態を改善し、非能率の汚名を拂拭する成績をあげている。やゝコスト高の欠点はあるが、運営の実績はまず良好と言えよう。その実績からみて、重要産業社会化の前途は明るいものがある。社会化は、それ自体が目的ではなく、公共の福利を増進する手段に過ぎないのであるから、社会化された産業が、従前よりもヨリ多く公共の福利をもたらしているか否かによつて、社会化の是非はきまるのである。この点において、石炭をはじめ、イギリスの既に社会化された産業の実態は、五年前労働党に政権を託した国民の期待を裏切つていない。

擴張よりは地固め

労働党内閣の現在の社会化計画でゆくと、一九五〇年までに全産業の約二割が公有または国有になり、八割がまだ私有企業として残るものと推定されている。一九五〇年以後かりに同じ速度で社会化が進められるとしても、ここ当分の間は、私有企業と社会化企業とのいわゆる「ミックスト・エコノミー混合経済」がつゞくわけである。このような過渡期の形態を経て、社会主義経済に移行するのが平和革命の特色であろうが、問題はこういう「混合経済」に起りがちな摩擦と停滞である。私有企業の意欲と社会化経済の方向とは、どうしても反撥しがちであり、いずれが優位にたつにしても、生産減退に陥り易い。それをどう切抜けてゆくか。こゝに、社会民主主義平和革命に志す者のみが当面する困難な問題がある。

この問題は、イギリスでは、今日までのところ比較的うまく行っているようである。その落ついた、多年の漸進的な改革に慣れた国民性の然らしめるところかも知れない。労働党の基盤として、その政策推進の支柱として、強力且つ秩序のある労働組合運動が存在す

ることも、大いに與つて力がある。資本家の側も概ね協調的で、むやみに反撥するようなことはない。大体において、経営者側も社会化政策に協力しているようである。これは今までに社会化された産業が各方面ともほど異論のないところであり、国有化さるべきものがされたという感があるからかも知れない。その證拠には、鉄鋼国有となると異論が多く、賛否の対立も深刻で、本年五月下院を通過して上院に回附されたまゝ、未だに実現しない状態である。今後、産業社会化計画が進展するに従つて、この種の摩擦は大きくなる。 「混合経済」の矛盾も出て来よう。 「地固め」^{ロツリデザイン}か「拡張」^{エキステンション}かの問題もこゝから起つて
いるわけである。

この問題に関連して一つの興味深い事實は、イギリスの労働組合が「社会化」の進展にあまり熱心でないと言われていることである。労働組合の主たる関心事は、賃金や労働条件を良くするための団体交渉の実力を増すことにあり、次いでは組合の機能を十分に發揮できるようにする形で、企業の運営に参加すること、つまり産業民主主義を拡充することであり、政府に対しては、そういう労働組合の方針を支持すると共に、所得の再分配や社会政

策の拡充に熱心に努力することを望んでいる。炭鉱国有や鉄鋼国有の程度はよいが、それ以上さき走つた遠大な社会化計画は、過去二世紀にわたつて煉瓦をつみ重ねるようにして發展して来た労働組合運動の肌にあわない、というところである。元來イギリスでは、知識階級ないし一般市民層の人々が急進的で、労働組合の方が保守的であるとも言われている。わが国の労働運動とは逆であるが、労働組合の本質から考えれば、イギリスの方が本當であろう。七百万から八百万に近い組合員を擁し、文字通りイギリス産業の脊骨となつている労働組合会議(TUC)の姿は、いわば巨大な象のようなものであろう。その歩みはのろいが着実であり、溫和しいが腕力は強い。

とはいえ、イギリスの労働組合は産業社会化に冷淡なわけではない。石炭をはじめ、既に社会化された産業の運営が比較的うまく行つている裏に、労働組合の地味な協力があることはさきに述べた通りである。労働組合とても、多年の社会政策の結果、また戦争の打撃も加わつて、富の偏在が少くなり所得の再分配に限界が来たことを十分知つている。また資本主義経済の性質も戦前特に一九三〇年前後とは異つてきており、生産増加必ずしも

失業を意味せず、むしろ生産増加のみが完全雇傭を維持する途であることを知るに至つてゐる。だから、個人企業の能力ではもはや生産を維持することが出来なくなつた今日、労働組合の方針が生産維持ないし増進の手段としての産業社会化に向つてゆくのは自然である。しかし、この場合も、あくまで現実的な完全雇傭の維持のためであつて、必ずしも社会主義的な理想のためではないことに留意しなければならない。労働生活向上の道が生産増加に通じ、完全雇傭の道が産業社会化に通ずるのである。だから、重要産業国有に關する労働組合側の問題の取扱い方は、極めて實際的である。

このような労働組合側の態度を反映しているせいも、本年四月の労働党年次大会に提出された一九五〇年総選挙綱領案「労働党は英国を信ずる」(Labour believes in Britain)には、新たな産業国有のリストは掲げられていなかつた。その中には「社会化された産業」という項目があるが、既に国有化した産業の成績とその今後の運用について、簡単に述べているだけである。「拡張」よりは「地固め」の道を選んだわけである。この綱領をみると、何よりもまず生産増加と、そのために必要な当面の企業振興策に重点がおかれた

ことが目立つ。産業社会化政策の意義は、労働党自身の立場からみても、それが果して生産増加、完全雇傭に役立つかどうかによつて決定する。そして、主として、この角度から、新たな国有化計画も立てられるのである。

科学と産業

産業社会化政策に関連して特記したいことは、労働党が科学の振興に力こぶを入れていることである。前に紹介した同党の総選挙綱領は、「科学と産業」と題して次のように述べている。

労働党政府の最も誇るに足る業績の一つは、科学に対して人類奉仕のための新しい取扱いを与えたことである。労働党は一九四五年以来、成果をあげて来た科学対策を、今後も更に一層推し進めようとするものだ。その方策とは、第一に大学や政府補助研究機関で行われている基本的研究を引きつゞき援助すること。この場合科学の完全な自由を絶対に侵さない。純理的な研究の発展なくして科学の発展はないからだ。第二に科学者や技術者

の養成を引きつゞき援助する。大学の科学部門や技術専門学校を拡張する。イギリスの主要産業都市には全部、アメリカやスイスその他の国における最高水準のものに劣らぬ技術専門学校を設立する。第三に人文関係の新らしい、重要な社会科学を引きつゞき奨励する。第四に科学研究の成果を産業の實際に吸収する努力をつゞける。ここに最も大きな欠陥があり、産業における科学の利用という点において、イギリスは二、三の競争国に遅れている。以上のように述べ、その具体方策を示している。

労働党内閣は、俗に「科学参謀本部」と呼ばれている科学政策審議會を内閣直属の機関として作つた。そして、これに既存の国防研究政策委員会を密着させ、ヘンリ・テイザード卿を両者共通の委員長に任命し、軍事科学と民間科学を統合しうる組織を作り上げていく。政府各省の研究機関の長がみな委員として、これに加わっている外、民間の優れた科学者を委員に委嘱している。さらにこの審議會に補足して、産業生産力委員会を設置した。やはりテイザード卿が委員長となり、自然科学と社会科学との両方面にわたつて、その研究が出来るだけ速く、産業生産力の向上に役立つよう指導している。この委員会には

労働組合の代表者も委員として参加している。これらテイザード卿を共通の委員長とする三つの機関と、それが今日まで果した大きな業績は、労働党の科学に対する良き理解と関心を具体的に示すものとして注目される。

「科学はそれ自身社会民主主義である」とは、「科学と社会主義」と題する労働党のパンフレットを書いたリッチー・コールドー氏の結語である。産業社会化政策も、原子力の研究を閑却しては成功の見込はない。コールドー氏は「今日、我々は科学が政治のベイス・メーカー（速度調整者）であることを認めざるを得ない」と述べているが、原子力時代の欧米を一巡して、私もこの感を深くした。いつまでも、十九世紀的な理論をむしかえしては、社会民主主義は前進しない。あくまでも視野の広い労働党に、学ぶべきものがあまりに多いことを、私は更めて痛感するのである。

ポンド切下と労働黨

こゝまで書いてきて、ポンド切下問題のため労働党内閣が危機に陥り、総選挙を今年内

にくりあげて行わざるを得ないのではないかという外電に接した。そうなれば、事態は労働党にとつて不利になる。こんどのポンド切下は、おそらく保守党内閣であつても不可避だつたと私は思う。チャーチル氏は、労働党の社会主義的政策殊に産業社会化政策がこういう事態をもたらしたのだと言つて攻撃しているが、私はそうは思わない。やはり、根本の原因は過般の大戦でイギリスの経済力、特に海外資産を使いつくしたことにあり、そこへもつて来て、アメリカ経済が収束に轉じ、世界的に物価が低落しはじめて、イギリスの対外貿易が逆調になつてきたせいである。

こんどのポンド切下の報をきいて、私は一九三一年の金本位停止を想い起した。ポンド切下は九月十八日だが、金本位停止もやはり九月二十日頃だつたと記憶している。当時の政府は、故マクドナルド氏の率いる「舉国」内閣であつた。

一九二九年五月の総選挙で、労働党は第一党になり、マクドナルド氏を首相とする第二次労働党内閣が生れた。しかし労働党の下院における議席は二百八十八名で、保守党の二百六十一名に対しわずかに多いだけであり、キャスティング・ヴォートは五十七名の自由

党の手に握られていた。自由党は労働党内閣を支持してはいたが、いわゆる閣外協力で、問題によつては相当つよく反撥したから、労働党単独内閣とは言え、その独自の政策を行うことは困難だつたわけである。殊に、最もむつかしい問題になつたのは、失業者の激増に伴う失業手当支出の増加——その国家財政への圧迫であつた。当時、世界経済は、一九二九年秋のウォール街の恐慌から始まつて深刻な不況に陥り、各国ともに失業者が続出した。イギリスは今日とは異つて当時は在外資産もあり、相当豊富な経済力をもつていたが、それでも世界的不景気の打撃はひどく、一九三一年の半ば頃から経済危機の頂点に達し、いわゆる資本逃避が起り、金融恐慌の状態に陥つた。この危機を打開するには、何よりもまず財政を緊縮すること、そのためには失業手当を削減しなければならない、といふのが保守、自由両党、財界、並びに保守的に傾きがちな一般世論だつた。これに対し、労働党の枢軸である労働組合は、当然のことながら極力反対し、失業手当削減以外の方法で財政危機を乗りきるよう、政府につよく要求した。労働党内閣、殊にマ首相とスノーデーン蔵相は非常な窮地に立つたわけである。

この時、マ首相はあつさり内閣を投出するか、労働党内閣として総選挙に問うべきだつたかも知れない。しかし彼は、スノーデン蔵相と共に、「舉国」内閣による危機打開に乗出した。一九三一年八月のことである。ヘンダーソン外相はじめ閣内の大多数と、労働組合を中心とする労働党内の大多数の反対にも拘らず、八月末マ氏を首班とする「舉国」内閣は成立し、労働党内閣は退陣した。党は直ちに党首マクドナルド氏を始め、「舉国」内閣に参加したスノーデン、トーマス、サンキーらの諸領袖を除名し、新たにヘンダーソン氏を党首として陣容を立直すと同時に、「舉国」内閣に対して正式に反対の立場を明らかにした。従つて「舉国」内閣は、保守、自由両党と、労働党から除名された十数名の議員で組織された国民労働党ナショナル・ラボラーズ・パーティによつて構成されることになり、「舉国」の実を欠いたわけである。そのためか、マクドナルド「舉国」内閣は、金本位を停止して一應金融危機を乗りきつたのち、議會を解散した。総選挙は十月行われている。その結果は、保守党の大勝と労働党の惨敗に終つた。労働党は僅か四十六名（非公認を合せて五十二名）の少数党に顛落し、保守党は四百七十一名（下院議席定員は六百十五名）という絶対多数を占めたのであ

る。その後、第二次大戦が始まるまでの十年間、途中一九三五年十一月の総選挙で若干恢復（百五十四名に）したものの、ズツと労働党の苦難時代がつゞいた。

私がこゝに一九三一年当時のことをながくと述べたのは、こんどのポンド危機をめぐる情勢が、当時の金融危機に似ているからである。ただ異なる点は、労働党内閣がこんどは議会の絶対多数をもつており、党内の結束も固いことである。だがら、当時の金本位停止に匹敵するポンド切下を断行することも出来たわけであるが、しかし程度の差こそあれ、資本主義経済の枠の中で社会主義的な政策を平和的、民主的に進めてゆくことに伴う悩みというか、国民全体の利益のために時には労働階級の利益を犠牲にしなければならぬ苦しさが、一九三一年当時と同様に、こんどのポンド切下という非常措置に現われているような気がしてならない。アトリー首相は、社会保障政策を若干再検討しなければならぬかも知れないと言っているし、クリップス蔵相は賃金の引上を抑制すると言っている。ともに、総選挙をひかえて、勇気の要る言葉である。それ以上に私は、労働組合の代表者が政府の説明を了承し、さし当り労働組合にとつて明らかに不利なポンド切下と、それに伴

う処置に協力する態度を採つてゐることに敬服せざるを得ない。私は、出来れば総選挙が豫定通り明年夏行われ、それまでの任期の間に、労働党政府が労働組合その他の協力によつて、ボンド切下後の対策を完了し、公平な条件の下に過去五カ年間の治績、特に産業社会化政策の是非を国民の審判にゆだねることが出来るよう祈つてやまない。

青い鳥を求めて

昭和二十四年十二月十日印刷
昭和二十四年十二月十五日発行
定価一〇〇円

著者 片山 哲

印刷発行者 東京都千代田区有楽町二ノ三
杉山 胤太郎

発行所 東京都丸の内 大阪市中之島 小倉市砂津
朝日新聞社

(電話丸の内三・北浜二三・小倉三五八)

政治意識の解剖

A⁵判
二二六頁

蠟山政道編

四〇〇円

中國白書

A⁵判
四九四頁

アメリカ國務省

四〇〇円

通商白書

B⁶判
八七頁

通商産業省

八〇円

アメリカ特派

B⁶判
二二七頁

高野

信著

一七〇円

東京・銀座
教文館

KYO BUN KWAN



朝日新聞社刊